

國學院大學學術情報リポジトリ

Regard on Inquisition and Witch-hunt, review of commonplaces and synthetisis : Toward the origin of modern justice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Lacvivier, Paul de メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001659

魔女狩りと宗教裁判を巡って（その一）

その真相を明らかにし、近代訴訟制度の起源に迫る

Paul de Lacvivier

前書き

本論の起筆の本来の動機は「魔女狩りと異端審問を無条件に結びつける誤解を糺す」ということにある。というのも、一般人はもちろん、学者に至るまで、魔女狩り、異端審問というそれぞれ本来、異質の現象を混同することがおもうおもうにしてあることに気づいたからだ。そして、フランスにおける先行研究を改めて細かく調べることにより、本論が生まれた。

比較法制史を試みるという観点から、つまり比較法制史でいうと、異端審問は重要な意味を持つことを発見した。というのも、異端審問にこそ近代訴訟制度の起源があるということを発見したからである。この意味で前近代における近代的な訴訟制度の起源を探ることによって次の幾つかの問題に光を照らす試みでもあるともいえる。日本法制史とフランス法制史を比較検討することに際してどういう共通点と相違があるのか、また、前近代と近代の相違はどこにあるのかといった課題への問題意識の一助となることを期待する。最後に、前近代のフランス訴訟制度を紹介する意味もあるということから、本論を起筆することにしたということも付け加えよう。

本論の構成について

本研究を作成した際、長文になってしまい、二つ三つの論文に分けることになった。本論は近世期における魔女狩りを中心に見ていくことになる。後半は異端審問に関する論文となる。

初めに

フランス史界の状況と沿線
革命歴史観からの脱出

日本における西洋史に関するイメージは、さまざまではあると言えるかもしれないが、大きく言うところ「近代主義的な歴史観」で取られがちである。ここでいう「近代主義的な歴史観」または「革命歴史観」というのは、フランスでは主に19世紀末に普及してきた似非歴史学に基づいた歴史観であり、根拠なしに中立という立場、客観的な立場をとるふりをしながら、その実は反教権と反王権の目的で書かれた歴史である。教科書をはじめ、かつてから一般的な研究もそういう傾向にある。学界では最初から激しい論戦が続いたが、1970年代よりフランスの歴史学ではこういった「革命歴史観」は大きく見直されてきた。また、学界ではいわゆる19世紀らしい政治的に利用された革命歴史観から一歩外れて、真面目に素直に丁寧に見続けてきた研究がコツコツと積み重ねられたおかげで、現在の先行研究に基づいた「宗教裁判」を正確に認識することが可能となった。さらに言うと、ほとんどの場合、教会や信仰に対して批判的な研究者が多い中、少なくとも無関心である中、過去に対する革命歴史観が見直されたという研究状況は評価に値するだろう。しかしながら、世間では学界と違って、19世紀の一番根拠のない似非歴史家の説のみが蔓延している状態が続いている事実もある。以上は現代フランスにおける状況である。

日本における「西洋観」
に関わる諸問題
西洋は一枚岩ではない
本論の目的

一方、現代日本において「西洋」と言った時、「近代的な西洋」を指していると思われる。現代を目的論でとらえないで、現代は近代より進歩し良くなったという先入観を持たずに、前近代の価値をあえて求めようとする前近代の欧州、欧州の本来の全体像を描く研究などは、日本では少ないと思われる。一般書になると、なおさらのことだろう。幾つかの具体的な課題に関して言えば、偏狭な見方だけが日本で紹介されて、時には完全に間違いだらけの紹介もなくはない¹。日本では、そういった西洋の歴史についての誤解は悪意を以てなされるわけでもなく、欧州から日本に直輸入され

続け来た歴史観に原因があると思われる。これは、日本では多くの場合、「西洋史」として入ってきた歴史が革命歴史観一色だったので、仕方のなかったことだと言えるだろう²。本論では、このように誤解されている典型的な課題をとりあげることにしたい。フランスとその周辺国の学界における最近の先行研究を踏まえて紹介することにする。入門書として取り扱っていただければ結構だと思うが、もう少し深く調べるためには、直接一次文献を参照することに越したことはないので、本論がそのきっかけになれば幸いだと思う。少なくとも、先行研究の現状や主な基礎知識をできるだけ織り込む所存である。

本論の課題と構成

その中で特に巷間に付されて久しい所謂「魔女狩り」と「宗教裁判」あるいは「異端審問」を本論の課題にする。

最初にそれぞれの現象の実態を整理して紹介していこう。魔女狩りと異端審問の異質性と歴史上の無関係性を示すことに努める。また、魔女狩りは近世期に属する歴史的な現象なので、そのついでにフランス革命以前の訴訟制度の状態をも紹介してみたい（本論）。

これについて、訴訟制度といった観点から、近代的な手続き法への重視、それから糾問訴訟（あるいは弾劾訴訟）の起源が13世紀の異端審問に由来していることを示したい（その二）。

最後に、理解の一助となるべく、付属資料に、スペインの異端審問制度の手続きの図式化された資料を補足的に加えることにした（その二）。

方法論に関する注意

本論は、フランスの学界の先行研究を中心にしている。なるべく多くのフランス語原文の引用を脚注に織り込んだ。このように、すくなくとも、本論は先行研究を日本で紹介するという狙いもある。

また、ドイツ系の先行研究は比較的織り込まれていないことはあらかじめ断っておこう。また本論では便宜上、日本語の先行研究についても殆ど

触れないことにしている。表記について一般的に定着している人物・場所の名前以外、ローマ字のままにしている。

日本学界の先行研究における本研究の位置づけについて

魔女狩りに関する先行研究は多くみられて、情報源として多岐にわたっている。本論文を起筆して作成した中、日本における先行研究を特に意識しないままに進めていって、本来ならばフランス語で作成すべきだったかもしれないが、日本における先行研究を読み、あちこちの一般人の意見を聞き、先生の方々の見解をも聞きながら、同じような誤解が多くあると感じられて本論を進めていった。

日本における先行研究に関して、多くのものがあり、訳書もあり、情報源としてかなり豊であるとする。その代表的な先行研究を通覧した結果を以下の様に指摘をしたい。

第一に気づいたのはドイツ系の研究に基づく研究が多数を占めて、フランス・スペインなどに関する研究は少ない³。本研究はそれを補うことにしながら、なるべく多くのフランス先行研究を紹介して（多少、スペインのものも）、その全体図を俯瞰できるように努力した。

1125号『思想』から見られる現象

第二に、厳格に歴史学と法制史という観点から見た魔女狩りは非常に少ない。小林繁子の緻密な研究以外に殆どないと見た。それをよく示すのは、2018年1125号の『思想・魔女研究の新潮流』に収めてある九つの論文であろう。その内に二つだけが厳密にいう歴史学に属する。小林繁子氏の『〈魔女〉は例外犯罪か』と谷口智子氏の『リマの異端審問』のみである。また、後半の論文ですら、実体を把握するために乏しい材料に基づいた研究である⁴。他の論文は社会学あるいは宗教学あるいは文学あるいは「表象」や「受容」や「神話」に関する研究であり、歴史学に沿った方法論で書かれた研究でもない。「魔女」といった社会課題に憧れている多くの人々がいる中、面白く書かれる論文は多いが、その歴史実体を正確に把握するために妨げになると見た。

本研究は歴史学と法制史という観点からそれを補うように努力した。

第三に、キリスト教と魔女狩り、西洋論をする
西洋観、キリスト教に
についての誤解
ために魔女狩りというテーマがよく使われること
がある⁵。しかしながら、殆どの場合、ドイツ系の研究を中心に引き継い
だせいか、あるいは社会学など、歴史学ではない「フェミニズムのために
作り上げられた魔女狩りに関する神話」を歴史であるかのように引き継い
だせいか、「西洋とキリスト教を一枚岩である」という偏狭のせいか、魔
女狩り、キリスト教と西洋を結びついたり全体図を書いたりすることに關
する言及は的外れなものほとんどであることを見た。カトリックとプロテ
スタントの区別の曖昧さ、欧州の伝統的な信仰観に関する多くの誤解、
70・80年代に流行った「中世欧州の暗黒時代」という神話や異端審問官な
どに関する小説的な神話などは殆ど検討なしに受け継がれている。本研究
は歴史的な実態を明らかにするために作成したものである。また、「古よ
り続けられた魔女の信仰」といった幻想⁶は間違っている見解であること
も取り上げた一つの課題である。

本論に入る前、脚注20番目に取り上げられた有
誤解の一例、『魔女の槌』
名なる『魔女の槌』に関する誤解を例に以上の指
摘を根拠づけることにする。『魔女狩り』（森嶋恒雄）の概説書は通説とな
る言及が見られるので、これを引用しよう。「『魔女の槌』が果たした役割」
(63頁)という副題に、「魔女裁判は異端審問として出発した。(…)そこで、
魔女裁判を異端審問として正当化することが、言いかえれば、「魔女」が「異
端者」であることの証明が、教会当局にとって必要、かつ重要な課題となっ
た」。で、『魔女の槌』という書物は二人の異端審問官、ドミニコ修道士に
よって作成されたからということで、異端審問と魔女狩りを結び付けられ
ることがほとんどである。しかしながら、1486年の『魔女の槌』という書
物はむしろ、異端審問と魔女狩りは関係がないことを証明する。なぜなら
ば、『魔女の槌』の趣旨は、ドイツに滞在していた二人の異端審問官が、ヴェ

チカンに「魔女狩りを正当化し、異端審問に出廷してもらえるように」訴えた建白書であったからである。このような建白が存在するという事は、裏を返せば、魔女を異端審問にかけることはまったくできなかった事実があるということだ。そして、そのあとはどうなったのだろうか？ ヴァチカンはその建白を受けないばかりか、1490年、教皇 Innocent 8 世の下、禁書としたのである。つまり、『魔女の槌』は異端書であるということになる。確かに、『魔女の槌』の影響力は大ではあったが、逆に、プロテスタントと異端の拡張に伴って、このような魔女狩りという異端も拡張して、カトリック教会はこれを否定していたものの、カトリック教会の管轄から逃れた地方では何ともできなかった。結論は「魔女狩りは異端審問の正統なる裁判を否定した上、その異端審問的な手続きを篡奪し歪曲した上に成り立つ。またカトリック教会と関係なく、カトリック教会の正統性を否定したことによって勃発した魔女狩りである」というのが真実である。以上で見られるように、史実を正確に並べることだけで実態について多くのことが見えてくる。先行研究が膨大にあるなか、本研究では新しい情報を打ち出すことは少ないが、微力ながら時代錯誤を避けて当時の状況に置かれた魔女狩りと異端審問の実体を明らかにするように努力をして少しでも史実に沿った全体図が見えて頂ければ何より幸いである。

1. 魔女狩りの真相

結論からいうと、フランス世間において通説となっているのは、次の一行で纏めることが出来るだろう。

ある通説。。 「中世期において、百万人の魔女がカトリックの宗教裁判によって、焼かれた」という主張は一般フランス人なら通説となっている。日本ではいかがだろうか。この一行を読んで、読者の間に違和感はないだろうか。

この通説に従うと、公教会（カトリック教会）⁷が歴史上、一番苛酷・残酷なる組織であり、大量に無実の可哀そうな女性を殺戮したというような

印象を与えている。しかしながら、これが典型的な偽造歴史である。

では、以上の文章にはどのぐらいの誤謬があると思われるだろうか。

通説の過ち
四つの過ちが含まれている。第一、中世期において魔女狩りはなかった。第二、百万人という数字は大きく間違っている。第三、「魔女」だけが狩られたわけではない。第四、カトリック宗教裁判は、「魔女」を一人たりとも⁸裁いたことはない⁹。

つまり、以上の偽造歴史は、次のような印象を付けようとする。中世は暗黒時代である上に、公会堂や聖職者は悪であり、魔女は無罪で犠牲者である云々。

ちなみに、以上の歴史は19世紀後半に出来上がった神話¹⁰である。革命を礼賛していた歴史家が革命を正当化するため、また反教権という意味でもカトリックを攻撃するために根拠なしに作り上げられた神話¹¹である¹²。

さて、かかる誤謬に目を当てながら、それらの誤謬を糺してみよう。

a. 中世期においてではなかった

魔女狩りという現象が確かにあったことは、事実である。しかしながら、焼かれた「魔女」は、主に1550年ごろから1650年ごろまでという間になる¹³。従って、通常長いとされている中世期（476年～1492年¹⁴）とは無縁である。裏を返せば、「魔女狩り」はむしろ、一般的に良い評価がなされているルネサンス¹⁵の産物であることになる。つまり、明るく科学的な啓蒙的な時代とされているルネサンスこそが、実は血塗られた宗教戦争の上に、人々を焼いた時代なのだ。

b. 計画的なことでもなかったし、全欧州で半世紀の間に「魔女狩り」で逮捕された人々のうち、最大でも5万人の死刑にとどまった

そして、所謂魔女狩りがあったとしても、国・地域別で実情が結構まち

まちであり、ある種、不可測的あるいは偶発的に魔女狩りが生じるという傾向が強い。死刑の数字に関していえば、勿論、正確に誰にも決定的な結論を出せないかもしれないが、主な歴史家の評価によれば、17世紀に限って言えば、全欧州において、魔女狩りによる死刑は最低3万人から最大5万人と見積もられている¹⁶。つまり、16世紀も含めていえば、大きく見積もってみても、つまり、17世紀における比較的高い数字を倍々にしても、おおざっぱな見積もりをしたとしても、百万人などは到底あり得ない数字になっている¹⁷。

c. 町も村も大都会も、女も男も、若手も老人も、聖職者も非聖職者も、誰でも「狩られた」だ

魔女狩りは一括した、統一的な現象ではない
男性も聖職者も処刑された
魔女狩りの起源は異端審問ではない

続いて、「魔女狩り」という現象は、最初に起きた時期の場合、大体田舎が舞台だったものの、17世紀に入ると、逆に町の方に移っていく。ところが、「魔女」といっても、女性だけではなくて、誰でも「狩られた」わけである。例えば、17世紀に入って来ると、フランス王国において、どんどん女性が男性を告訴し訴えた結果、男性が起訴されることが多くなって、死刑に処された事例も多くある。そして、聖職者も犠牲になったという案件さえある¹⁸。ちなみに、基本的に、悪魔憑きという疑いから、サタンと誓約したという容疑で起訴されたので、現代に定着化されている「魔女」というような優しいイメージとは違う現実があった¹⁹。非常に珍しかったものの、「悪魔教」あるいは「悪魔憑き」といった新興宗教団体の怪しい行動が確認された時、社会上、何もしないわけにもいかない場合があっただろう。また、15世紀における数少ない魔法の裁判事件においては男性のみが告訴されていることも特筆すべき点であろう。つまり、15世紀の案件は、このような公安上の問題と数少ない限られた地域と限られた案件のみであり、魔法としてではなく、「異端を捜査していたら、証言や証拠がいくつかあって、次いでという形で魔法の利用が確認された」ぐらいであり、ただそれ

は裁判の中心でもなく、また判決の動機でもなく、異端として裁かれたということなのである。そして、このような「新しい現象だったサバト」に興味を持った傍観者が覚書のようなものに記して、百年後に魔女狩りを正当化するために利用されたというのが実態である。したがい、それ以上でもそれ以下のことではなくて、魔女狩りは異端審問という制度とカトリック教会との直接な関係はなかったといえよう。

魔女狩りと言われるが、
処刑された女性率は4割
を超えない
旧体制の司法制度の見直し

もちろん、近代期の魔女狩りは大多数の犠牲者が女性だったので、「魔女」という言い方になっただろうが、真相とは違った印象を与える傾向があるので、要注意なのだ。その上、フランス王国において一番激しかった1550年から1650年までの時期ですら、上訴されてきた魔法裁判事件の内に処刑された女性は平均して全体の四割を超えない²⁰。1600年代から魔法に関する案件は自動的に上訴されるようになったことから考えると、現地においても必ずしも女性は対象の多数派を占めたわけでもないということになる。また魔法犯よりも、女性が処刑される一番多い裁判は赤ちゃん殺し²¹と毒殺犯であった²²。さらに言うと、先行研究によると、アンシャン・レジームの司法制度において、司法官たちは拷問をなるべく使わないことにしていた²³。それだけではなく、アンシャン・レジームの司法制度は欧州において一番良い司法制度だったとの評判だった。それは、現地では軽い犯罪にかかわる案件になる和解といったような解決方法を志向していたので、多くの案件は訴訟にならないでスムーズに解決されていたと同時に、訴訟までいく深刻な案件に対しても、効率的に、公平に、速やかに善く裁いていたという好評価だったのである²⁴。訴訟手続き様式としては、「ロマノ・カノニック手続き」と呼ばれて、まさにスペインインクイジションに使われた手続き様式ではあったものの特徴的な「証拠」制度を使っていたのである²⁵。

d. カトリック教会と無関係で、世俗裁判による残酷な判決だった

魔女狩りの現象は世俗裁判による暴走糾問訴訟の悪用権力は弱かった分魔女狩りは激しくなるエリートにまで迷信の普及のせいでは起きた現象

「魔女狩り」の「狩り」という表現もふさわしくない。死刑された人々は、起訴されて、処刑を受けたわけであり、勝手に「狩られて」殺されるのはごく少なかったということである。とはいえ、

公教会とは完全に無関係であり、世俗裁判によって裁かれたという実態であり、その意味でむしろ、世俗裁判が本来ならば教権裁判が裁くべき案件を処理していたということが研究により明らかにされた²⁶。下級司法官らこそが、捜索の起訴様式の手続きを使って（所謂 Procédure Inquisitoire・糾問訴訟）²⁷裁判を行うのが最も一般的だった²⁸。裏を返せば、ある地域において教権が弱ければ弱かったほど、魔女狩りが流行ったという事実がある²⁹。というのも、カトリック教会が弱いときに、或いは、フランスの場合、国王の権威が弱かった時に、言い換えると、下級裁判官が自ら正当性を主張して独裁的に振舞っていた地域の世俗裁判所を制限できるような権威が弱ければ弱いほど、それが恐怖のせいによせよ³⁰、何かの特別な事情によせよ³¹、狂信的な暴動が起きた時、正当な権威によってこれらの現地での暴動を止めようがなかったということである。また、だれでも、エリートを含め、つまり司法官や教養のある人々でさえ、魔術や魔法が存在することを確信していた事実もある³²。これらの暴動を制限・抑制できた教会と王室が弱かった時と場所では、かかる暴動を抑制しようがなかった。基本的にカトリック教会は世俗裁判の下級司法官による不正の行為を非難して、復讐のために悪用されていた魔女狩りを弾劾しつづけたという事実がある³³。また、カトリック教会の手の及んだところでは、具体的に不正に処刑された「魔女」を庇ってその身を守った例もある³⁴。さらに、フェミニストのいうように、当時の社会では女性に対する蔑視が定着していたということは基本的になかった³⁵。むしろ、先行研究によると当時の村社会における女性の立場と役割は強かったのである³⁶。

もう一つ指摘しておく、抑えられがたい大衆的な狂信的暴動は勿論あったが、一般的によく整えられた裁判を通じる形にあえてすることで、弱いものを（老婆などが多かったが）、贖罪身代わり（いわゆるスケープゴート）にしたのは³⁷、司法官をはじめ、権力あるいはある種の権威（特にプロテスタントの牧師）を有していた権力者による煽動と権力の悪用の結果である事実が明らかになっている。このような場面はよく確認されている³⁸。典型的な例を挙げると、ルターによる次の文書がある。1529年の彼の著書である『大教理』からの引用である。

「バターと牛乳と鶏小屋で卵などを盗む魔女にせよ、魔法使いにせよ、それらに対して容赦してはならない。旧法³⁹において、司祭らが罪人に投石したように、できれば、私自身が彼女らの火刑台に火をつけたいところだ。」⁴⁰

それとは対照的に、カトリック教会が強い位置を占めていた地域において、例えばスペインでは、魔女狩りによる犠牲者が非常に少なかった⁴¹。さらにいうと、むしろカトリック教会が歴史上初めて、医療専門家の意見を仰ぎ、精神病を正式に認めて、その結果、多くの「魔女」が無罪とされて解放された事実に注目する必要があるだろう。これが、1657年の教皇勅令が発布された際、精神病を正式に認めて、魔女・魔術・魔法使いの案件になる場合、必ず医者意見を「求めよ」との勧告があったが、教権特別裁判のない国は（フランス王国は当時そうだったが）その勅令による効果はほとんどなかった⁴²。かかる事例で確認できるように、カトリック教会は科学・理性などと相容れないことはなかったどころか、理性を支えたといえる上に、当時、不幸にさらされた犠牲者を救おうとしたといえる。

カトリックが強い国では
魔女狩りの現象は少なく
なる

理性と信仰の関係

近代期に入ると迷信の流行

理性と信仰の視点から魔女狩りという現象をみても面白いことが分かる。現代の常識と違ってカトリック教会が強ければ強いほど、実際、現に理性の位置づけが強かった、つまり人々は合理的に行動していたという関係性が地域上確認できるのは興味深い事柄だろう。というのも、おうおうにして、宗教戦争が激しければ激しい場所であるほど、中世とまったく違ってむしろ迷信が流行するようになったとか、カトリック信仰が弱まれば弱まるほどに、「魔女狩り」という病が多くなっていったという事実があるのだ⁴³。つまり、カトリック信仰の弱体化を経験した場所においてこそ、迷信が蔓延したということである。このような観点からの魔女狩りの現象を調査する今後の研究に期待したい。

e. 魔女狩りの解決へ

カトリック教会が認めた 精神病 フランス王国の勅令による解決 フランスにおいて1682 年以降の拷問

精神病を認める1657年の教皇勅令が発布された上に、それにつづいて、フランス王国においても、1670年の王政令（勅令）によって、全国での裁判所において死刑判決が言い渡された時、あるいは拷問という刑罰が判決において記された時に、パリ高等法院にまで自動的に上訴する義務があるということになった。これが、結果的に、魔女狩りの終焉を告げることとなった。また、1682年の「刑法に関する勅令」において刑法裁判に係るすべての手続きと流れが厳密に規定されている。拷問に関して記すべき点として、拷問を最低限に抑える範囲が規定された。ちなみに、1682年の勅令に明記されているように、1682年から1789年までは、拷問というのはあくまでも刑罰の一つであって、有罪が確認されて有罪という判決が出た時のみに限って、その刑罰として拷問という可能性はあった。が、拷問という刑罰に処するためにはいくつか制約があった。共犯者の恐れがあった場合、あるいはまだ自白を拒み続けた時、自白を得るための二つの場合だけに利用された（キリスト教的な社会だったため、自白無

しに死刑に処するのは地獄行きの切符となるというような意味を含んでおり、裁判官などはその責任を取るわけにはいかなかったことから最後に自白するチャンスを与えるという意味がこの場合の拷問にはあった)。その上、拷問とはいっても、判決において「質問」の具体的な形式が決められているのに加え、敲きの数も決められており、その打ち数が満たされた場合、仮に自白無しでも拷問が終わったとしても、再度、拷問にかけることは厳しく禁じられていたのだった。要約すると、拷問というのは自白を得るために利用されてはいたものの限定的なものであったということだ⁴⁴。

王室とカトリックが保護した犠牲者とのこと つまり、王室やカトリック公教会の権威が回復した暁に、そして、実際に現地でも回復してきたことにつれて⁴⁵、暴動の流行は初めて抑制されて、魔女狩りも終わったのである。フランスの場合に限って言えば、実際、1610年以降、魔法犯で処刑される被告人の件数は激減して殆どなくなっている⁴⁶。それは、宗教戦争の真ん中に起きたリンチを抑えるため、パリの高等法院の司法官が早い段階から自動的な上訴を設置し、下級の裁判に上訴するように命令し、義務化した結果であり、特に死刑と拷問の場合、自動的な上訴を義務化する1670年の勅令に先立って、魔法犯に関する自動的な上訴は1602年からすでに何回の勅令をもって義務化された結果である⁴⁷。

小結に

結論を改めて記しておこう。「魔女狩り」という表現は不適切であり、「悪魔憑き容疑による世俗裁判による執行死刑の流行」とでも訳すべき現象は、主に宗教戦争期に流行して、場所・空間的に不可測的に生じながらも⁴⁸、カトリック公教会と王室の権威の弱い地域にこそ流行し、カトリック教会とフランス王室の権威が改めて強くなった暁にその終焉を迎えたというものであり、誰でもその裁判容疑者になりえたというのが、いわゆる「魔女狩り」の真相なのだ。

次の論文において、「異端審問」を中心に取り上げることにする。その起源、意義、訴訟手続き、変遷と実体を紹介することになる。

参考文献

日本における先行研究

- 森嶋恒雄、『魔女狩り』、岩波新書、1982年（第22刷）
- 牟田和男、『魔女裁判』、吉川弘文館、2000年
- 思想・魔女研究の新潮流』、岩波書店、2018年1125号
- 上山安敏、『魔女とキリスト教』、講談社学術文庫、2018年
- 共著『魔女狩りと悪魔学』、人文書院、1997年
- 小林繁子、『近世ドイツの魔女裁判』、ミネルヴァ書房、2015年

中世の異端審問に関する先行研究はその二の掲載の際に明記することになり、本論で省く

書籍

- 論文集、Inquisition et société en pays d'oc (XIIIe et XIVe siècles) (インクイジションとフランス南部社会、13-14世紀), Privat, Toulouse, 2014
- Bernard Guy (Julien Théry 訳), *Le livre des sentences de l'inquisiteur de Bernard Gui* (Bernard Guiの判決集), CNRS Edition, Paris, 2018.
- Didier le Fur, *L'Inquisition* (インクイジション), Tallandier, Paris, 2012.
- Jean-Louis Biget (論文集), *Hérésie et inquisition dans le Midi de la France* (フランス南部における異端とインクイジション), Picard, Paris, 2007
- Nicolas Eymerich (Louis Sala-Molins 編集), *Le manuel des*

inquisiteurs (審問官の手引き), Albin Michel, Paris, 2001

- Michel Roquebert, *Histoire des cathares* (カタリの歴史), Perrin, Paris, 2002
- Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition), Kontre Kulture, 2014
- Marion Sigaut, 君主制の中央集権化からブルジョワの革命まで (De La centralisation monarchique à la révolution bourgeoise), Kontre Kulture, 2014
- Jean Sévilla, 画期的な闘士なる著作叢 (Ecrits Historiques de combat - Historiquement incorrect), Perrin, Paris, 2016
- Jean Sevilla (監督), *L'Église en procès* (裁かれているカトリック教会), Tallandier, Paris, 2019
- Joseph de Maistre, スペインのインクイジション (特別搜索裁判) [L'inquisition espagnole], Chez Méquignon fils aîné, Paris, 1822.
- ノーマン・コーン、魔女狩りの社会史、岩波書店、東京、1983

論文

中世に関するインクイジション

- Albe Edmond. L'hérésie albigeoise et l'inquisition dans le Quercy (Quercy 地方におけるインクイジションとアルビ異端). In: *Revue d'histoire de l'Église de France*, tome 1, n° 3, 1910. pp. 271-293
- Albe Edmond. L'hérésie albigeoise et l'inquisition dans le Quercy (suite) (Quercy 地方におけるインクイジションとアルビ異端・続編). In: *Revue d'histoire de l'Église de France*, tome 1, n° 4, 1910. pp. 412-428
- Bériou Nicole. La confession dans les écrits théologiques et pastoraux du XIIIe siècle : médication de l'âme ou démarche judiciaire ? (13世紀の神学的と牧師的な書物における告解。靈魂の治

- 療であるかそれとも訴訟的な動きであるか?) . In: L'aveu. Antiquité et Moyen Âge. Actes de la table ronde de Rome (28-30 mars 1984) Rome : École Française de Rome, 1986. pp. 261-282. (Publications de l'École française de Rome, 88)
- Boureau Alain. Droit naturel et abstraction judiciaire. Hypothèses sur la nature du droit médiéval (自然法と法的な抽象化。中世期の法学の本質に関する推測). In: Annales. Histoire, Sciences Sociales. 57^e année, N. 6, 2002. pp. 1463-1488
- Delaruelle Étienne. René Nelli. — Le phénomène cathare (René Nelli 著『カタリ派という現象』). In: Cahiers de civilisation médiévale, 11e année (n° 43), Juilletseptembre 1968. pp. 432-433
- Dondaine Antoine. Le registre d'Inquisition de Jacques Fournier. A propos d'une édition récente. (Jacques Fournier のインクイジション裁判記録書。新版について) In: Revue de l'histoire des religions, tome 178, n° 1, 1970. pp. 49-56
- Douais Marie-Jean-Célestin. Guillaume Garric de Carcassonne professeur de droit et le tribunal de l'Inquisition (1285-1329) (インクイジション裁判と法博士、Guillaume Garric de Carcassonne-1285-1329年). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 10, N° 37, 1898. pp. 5-45
- Douais C. L'inquisition en Roussillon. - Cinq pièces inédites (1315-1564) (Rousillon 地方におけるインクイジション・新しい資料を五つ発見). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 4, N° 16, 1892. pp. 533-540
- Dossat Yves. II. Innocent IV. Les habitants de Limoux et l'Inquisition (教皇 Innocent 四世、Limoux の住人たちとインクイジ

- ション裁判). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 61, N° 1-2, 1948. pp. 80-84
- Dossat Yves. L'inquisition toulousaine de 1243 à 1273 (1243年から1273年までの Toulouse 地方におけるインクイジション裁判). In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 37, n° 130, 1951. pp. 188-191
- Dossat Yves. Le chroniqueur Guillaume de Puylaurens était-il chapelain de Raymond VII ou notaire de l'inquisition toulousaine ? (年代記者の Guillaume de Puylaurens はレイモン7世の従事司祭だったか、それとも Toulouse のインクイジション裁判の公証人だったか?). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 65, N° 23, 1953. Hommage à la mémoire de Joseph Calmette. pp. 343-353
- Grisart M. Les Cathares dans le Nord de la France (フランス北部におけるカタリ派). In: Revue du Nord, tome 49, n° 194, Juillet-septembre 1967. pp. 509-519
- Guillemain Bernard. Une synthèse sur l'Inquisition : Dossat (Yves), Les crises de l'Inquisition toulousaine au XIIIe siècle (1233-1273) (In Christo 裁判の総括研究。Dossat 氏の『13世紀の Toulouse のインクイジション裁判の諸危機』), Imprimerie Bière Bordeaux, 1959. In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 73, N° 53, 1961. pp. 106-111
- Jolivet Jean. Guy Testas et Jean Testas. L'Inquisition. (インクイジション裁判) In: Revue de l'histoire des religions, tome 175, n° 1, 1969. pp. 95-97
- Lafon Jean-Marc. Cendres et émeraudes : le catharisme romanescque au XXe siècle (灰と翠玉、20世紀の文藝におけるカタリ派). In:

- Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 115, N° 242, 2003. pp. 261-282
- Lieftinck G.-I. Une allusion au nom de Raymond de Peñafort dans une initiale enluminée ? (彩色の文字いのいてのRaymond de Peñafort の名前の暗示について). In: Scriptorium, Tome 1 n° 2, 1946. p. 314
- Paul Jacques. Élie Griffe, Le Languedoc cathare et l'inquisition (1229-1329) (Élie Griffe 著『Languedocにおけるカタリ異端とインクイジション裁判』). In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 68, n° 181, 1982. pp. 270-271
- Maire Vigueur Jean-Claude. Justice et politique dans l'Italie communale de la seconde moitié du XIIIe siècle : l'exemple de Pérouse (13世紀後半の都市国家のイタリアにおける司法制度と政治). In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 130^e année, N. 2, 1986. pp. 312-330
- Mollat Guillaume. Les Cathares en Corse (コルシカ島でのカタリ派). In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 100^e année, N. 2, 1956. pp. 147-150
- Mundy John. Noblesse et hérésie. Une famille cathare : les Maurand (貴族と異端。カタリ派の一族、Maurand家). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 29^e année, N. 5, 1974. pp. 1211-1223
- Rey Raymond. Le cloître de Saint-Sernin et l'Inquisition à Toulouse au XIIIe siècle (13世紀のToulouseにおけるSaint-Sernin回廊とインクイジション裁判). In: Bulletin Monumental, tome 110, n° 1, année 1952. pp. 63-69
- Roche Julien. Caunes-Minervois et l'hérésie cathare (Caunes-Minervois 都市とカタリ異端). In: Archéologie du Midi médiéval n° 6, 2010. L'abbaye et le village de Caunes-Minervois (Aude).

Archéologie et Histoire. pp. 105-113

- Vidal Jean-Marie. Procès d'inquisition contre Adhémar de Mosset, noble roussillonnais, inculpé de béguinisme (1332-1334) (Roussillonの一人の貴族、Adhémar de Mosset に対するインクイジション裁判。厳格主義という異端で起訴される)。In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 1, n° 5, 1910. pp. 555-571
- Zerner Monique. Du court moment où on appela les hérétiques des « bougres ». Et quelques déductions. (異端者を「Bougres」と呼ばれた短い時期について。それからの諸結論) In: Cahiers de civilisation médiévale, 32e année (n° 128), Octobre-décembre 1989. pp. 305-324
- La prison de l'Inquisition à Carcassonne (Carcassonne におけるインクイジションの刑務所)。In: Bulletin Monumental, tome 59, année 1894. pp. 288-291

カタリ異端

- Bozoky Edina. Les cathares comme étrangers. Origines, contacts, exil (外国人としてのカタリ派。起源、交際、追放)。In: Actes des congrès de la Société des historiens médiévistes de l'enseignement supérieur public, 30^e congrès, Göttingen, 1999. L'étranger au Moyen Âge. pp. 107-118
- Delcor Mathias. L' « Ascension d'Isaïe » à travers la prédication d'un évêque cathare en Catalogne au quatorzième siècle (Catalogne において、14世紀のカタリ派の司教の説教を通じての「イザヤの昇天」経典の姿)。In: Revue de l'histoire des religions, tome 185, n° 2, 1974. pp. 157-178
- Delaruelle Étienne. Le catharisme en Languedoc vers 1200 : une enquête (1200年のLanguedoc におけるカタリ主義を搜索する)。In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique

- de la France méridionale, Tome 1, N° 1, 1989. Langue et littérature d'oc et histoire médiévale. pp. 153-171
- De Waha Michel. Rituel cathare édité par Thouzellier (Christine) (Thouzellierによって出版されたカタリ派の経典について). In: Revue belge de philologie et d'histoire, tome 59, fasc. 2, 1981. Histoire médiévale, moderne et contemporaine — Middeleeuwse, moderne en hedendaagse geschiedenis. pp. 484-486
- Dmitrevski Michel. I. Notes sur le catharisme et l'Inquisition dans le Midi de la France (フランス南部におけるカタリ主義とインクイジション裁判に関する覚書). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 36, N° 141-142, 1924. pp. 294-311
- Dmitrevski Michel. I. Notes sur le catharisme et l'inquisition dans le Midi de la France (suite) (フランス南部におけるカタリ主義とインクイジション裁判に関する覚書・続編). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 37, N° 147-148, 1925. pp. 190-213
- Duvernoy Jean, Thouzellier Catherine. I. Une controverse sur l'origine du mot «Cathares» (「カタリ」という言葉の起源の論争について). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 87, N° 123, 1975. pp. 341-349
- Genieys William. Le territoire imaginaire du "Pays Cathare" (カタリ派の国の幻想国). Nouvelles dynamiques du développement local en milieu rural.. In: Pôle Sud, n° 7, 1997. Elites, politiques et territoires. pp. 118-131
- Gy Pierre-Marie. Les définitions de la confession après le quatrième concile du Latran (第4ラテラン公会議以降の告解の諸定義について).

- In: L'aveu. Antiquité et Moyen Âge. Actes de la table ronde de Rome (28-30 mars 1984) Rome : École Française de Rome, 1986. pp. 283-296. (Publications de l'École française de Rome, 88
- Magnou-Nortier Élisabeth. Le rituel cathare : Thouzellier (Chr.) Rituel cathare ; introduction, texte critique, traduction et notes (カタリ派の儀式), Paris, Ed. du Cerf, 1977. In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 91, N° 143, 1979. pp. 331-33
- Moore R. I. I. Nicétas, émissaire de Dragovitch, a-t-il traversé les Alpes ? (Dragovitch 異端者の密使、Nicétas がアルプスを渡ったのか). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 85, N° 111, 1973. pp. 85-90
- Pales-Gobilliard Annette. Le catharisme dans le comté de Foix, des origines au début du XIVe siècle (最初から14世紀まで、Foix 伯爵領におけるカタリ主義). In: Revue de l'histoire des religions, tome 189, n° 2, 1976. pp. 181-200
- Pales-Gobilliard Annette. Christine Thouzellier (1902-1982) (Christine Thouzellier 氏・1902-1982年). In: École pratique des hautes études, Section des sciences religieuses. Annuaire. Tome 91, 1982-1983. 1982. pp. 33-36
- Paul Jacques. Arno Borst. Les cathares. (Arno Borst 著『カタリ派』) In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 61, n° 166, 1975. pp. 78-81
- Poupin Roland. La spécificité occidentale du Catharisme et les relations bogomilo-cathares. (カタリ主義の西部的な特徴とカタリ派とボゴミール派との交際) In: Revue d'histoire et de philosophie religieuses, 70e année n° 2, Avril-juin 1990. pp. 149-164
- Rousseau Hervé. 2. L'interprétation du catharisme (カタリ主義の解

- 積について). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 24^e année, N. 1, 1969. pp. 138-141
- Sanjek Franjo. Albigeois et « chrétiens » bosniaques (アルビ派とボスニアの「キリシタン」). In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 59, n° 163, 1973. pp. 251-267
- Šanjek Franjo. Les « chrétiens bosniaques » et le mouvement cathare au Moyen Age (中世におけるカタリ派の運動と「ボスニアのキリシタン」). In: Revue de l'histoire des religions, tome 182, n° 2, 1972. pp. 131-181
- Shahar Shulamith. Le catharisme et le début de la cabale. (カタリ主義とカバラの発足について) In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 29^e année, N. 5, 1974. pp. 1185-1210
- Thouzellier Christine. 1. Les cathares languedociens et le « Nichil » (Jean, 1, 3) (Languedocのカタリ派と「Nichil」(ヨハネ、1,3)について). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 24^e année, N. 1, 1969. pp. 128-138
- Venckeleer Théo. Un recueil cathare : le manuscrit A.6.10. de la « Collection vaudoise » de Dublin (suite) (カタリ派のある経典・Dublinの「Vaudois蔵」にあるA.6.10の写本について). In: Revue belge de philologie et d'histoire, tome 39, fasc. 3, 1961. Langues et littératures modernes - Moderne taal- en letterkunde. pp. 759-793

魔女狩りと旧制体における司法制度について

- Audisio Gabriel. Procès pour un portrait : Henri IV et l'Inquisition (Rome, 1590) (肖像のための裁判。アンリ四世とインクイジション裁判、ローマ1590年). In: Mélanges de l'École française de Rome. Italie et Méditerranée, tome 118, n° 2, 2006. Fidelitas. pp. 379-390
- Boutelet Bernadette, Chaunu Pierre. Etude par sondage de la

- criminalité dans le bailliage du Pont-de-l'Arche (XVIIe - XVIIIe siècles) (Pont-de-l'Arche 半官区の犯罪件の現地調査 -17-18世紀). In: Annales de Normandie, 12^e année, n° 4, 1962. pp. 235-262,
- Casado Pierre. Paulette, Marguerite et les autres, ou les fonctionnements onomastiques dans un procès de sorcellerie en Languedoc à la fin du XVe siècle. (15世紀末のLanguedocにあった魔法裁判における名称の利用について。Paulette, Marguerite とその他) In: Nouvelle revue d'onomastique, n° 41-42, 2003. pp. 177-195
- Castan Nicole. La justice en question en France à la fin de l'ancien régime (旧体制末期のフランスに司法制度への非難) . In: Déviance et société. 1983 - Vol. 7 - N° 1. pp. 23-34
- Caveing Maurice. La fin des bûchers de sorcellerie : une révolution mentale (魔法の火刑台の終焉。精神上の革命であった). In: Raison présente, n° 10, Avril – Mai – Juin 1969. Sur le conflit israélo-arabe. pp. 83-99
- Clastres Pierre. De la Torture dans les sociétés primitives (原始社会における拷問について). In: L'Homme, 1973, tome 13 n° 3. pp. 114-120
- De Certeau Michel. Une mutation culturelle et religieuse : les magistrats devant les sorciers du XVIIe siècle (文化と宗教上の変遷。17世紀においての魔術師にぶつかる司法官ら). In: Revue d'histoire de l'Église de France, tome 55, n° 155, 1969. pp. 300-319
- Delumeau Jean. L'Édit de Nantes dans son contexte historique (当時の歴事情においてのNantes王令) . In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 142^e année, N. 4, 1998. pp. 1065-1073
- Denier Marie-Claude. Sorciers et croyances magiques en Mayenne aux XVIIIe et XIXe siècles (18-19世紀のMayenneにおける魔術師

- と魔術の迷信について). In: Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest. Tome 97, numéro 2, 1990. pp. 115-132
- Doublet Georges. Un évêque de Vence devant l'Inquisition (Vence 司教は宗教裁判にかかる). In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 16, N° 63, 1904. pp. 330-340
- Dunglas Marie. Sorcières, possédées, hystériques (魔女、悪魔懸り、ヒステリー). In: Les Cahiers du GRIF, n° 14-15, 1976. Violence. pp. 26-29
- Febvre Lucien. Sorcellerie, sottise ou révolution mentale ? (魔法は狂気あるいは思想革命?). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 3^e année, N. 1, 1948. pp. 9-15
- Extraits du Trésor des chartes. IV : exécution faite à Marmande de plusieurs femmes accusées de sorcellerie (1453). (Marmande における魔法罪で起訴された数人の女性の死刑について -1453年) In: Bibliothèque de l'école des chartes. 1849, tome 10. pp. 372-376
- Gauvard Claude. Ordeal et sorcellerie jugées par le Parlement à Paris et à Bordeaux au milieu du XVe siècle (15世紀の中葉、ボルドーとパリ 高等法院における魔法と神判の案件について). In: Bulletin de la Société Nationale des Antiquaires de France, 2009, 2012. pp. 43-54
- Garnero-Morena Christiane. Approche du phénomène de la sorcellerie en Ligurie occidentale (西部 Ligurie における魔術の現象を考える). In: Cahiers de la Méditerranée, n° 13, 1, 1976. Culture populaire, croyances, mentalités. Actes des journées d'études, Nice, 30 avril 1976. pp. 31-37
- Geschiere Peter. Sorcellerie et modernité. Les enjeux des nouveaux procès de sorcellerie au Cameroun. (魔法と近代性。現代カメルーンにおける新しい魔法裁判の行方について) In: Annales. Histoire,

Sciences Sociales. 53^e année, N. 6, 1998. pp. 1251-1279

- Ginzburg Carlo, Bonan Elsa. Présomptions sur le sabbat (サバトに関する考察). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 39^e année, N. 2, 1984. pp. 341-354
- Le Glay Marcel. Magie et sorcellerie à Rome au dernier siècle de la République (古代ローマの共和国末期における魔法と魔術について). In: L'Italie préromaine et la Rome républicaine. I. Mélanges offerts à Jacques Heurgon. Rome : École Française de Rome, 1976. pp. 525-550. (Publications de l'École française de Rome, 27)
- Lerner Michel-Pierre. Le protestantisme vu par Tommaso Campanella (Tommaso Campanellaのプロテスタント主義観). In: Revue d'histoire et de philosophie religieuses, 58^e année n° 2, 1978. pp. 163-191
- Muchembled Robert. La femme au village dans la région du Nord (XVII^e- XVIII^e siècles) (北部の村における女性について・17-18世紀). In: Revue du Nord, tome 63, n° 250, Juillet-septembre 1981. pp. 585-594
- Muchembled Robert. L'autre côté du miroir : mythes sataniques et réalités culturelles aux XVI^e et XVII^e siècles (神話を超えて。16・17世紀におけるサタン神話と文化的な現実について。). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 40^e année, N. 2, 1985. pp. 288-305
- Muchembled Robert. Sorcellerie, culture populaire et christianisme au XVI^e siècle, principalement en Flandre et en Artois (FlandreとArtois地方を中心に16世紀における魔法、民族文化とキリスト教について). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 28^e année, N. 1, 1973. pp. 264-284
- Ostorero Martine. Itinéraire d'un inquisiteur gâté : Ponce Feugeyron, les juifs et le sabbat des sorciers (恵まれたインクイジ

- ション裁判官の歩み。Ponce Feugeyron とユダヤ人と魔術師のサバト) . In: Médiévales, n° 43, 2002. Le bain : espaces et pratiques. pp. 103-117
- Paravicini Bagliani Agostino, Ostorero Martine. La genèse du sabbat (サバトの起源). Autour de l'édition critique des textes les plus anciens. In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 144^e année, N. 1, 2000. pp. 73-85
- Pierrette Paravy, A propos de la genèse médiévale des chasses aux sorcières : le traité de Claude Tholosan, juge dauphinois (vers 1436) (魔女狩りの中世末期における起源について。Dauphinois 地方の司法官、Claude Tholosan の論文 -1436年ごろ), p. 333-379
- Paravy Pierrette. Prière d'une sorcière du Grésivaudan pour conjurer la tempête (Procès d'Avalon, 1459 (Grésivaudan 地方の魔女の嵐を安ませるための祈祷について). In: Le Monde alpin et rhodanien. Revue régionale d'ethnologie, n° 1-4/1982. Croyances, récits & pratiques de tradition. Mélanges d'ethnologie, d'Histoire et de Linguistique en hommage à Charles Joisten (1936-1981) pp. 67-71
- Saint-Saëns Alain. Anton de la Fuente, ermite-pèlerin de Castille au XVIIe siècle. (17世紀、カスティーリャにおいての苦行者・隠修士、Anton de la Fuente 氏について) In: Histoire, économie et société, 1987, 6^e année, n° 1. pp. 35-50
- Sauzet Robert. Sorcellerie et possession en Touraine et Berry aux XVIe-XVIIe siècles (16世紀と17世紀の Touraine と Berry 地方における魔法と悪魔罹り). In: Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest. Tome 101, numéro 3, 1994. pp. 69-83
- Soman Alfred. La décriminalisation de la sorcellerie en France (フランスにおける魔法犯罪を処罰の対象から外す過程). In: Histoire,

économie et société, 1985, 4^e année, n° 2, p.179-203

- Soman Alfred. Le traître sur la sellette : réflexions sur le procès du duc de Biron (1602) (被告席の裏切り者。Biron 公爵に対する裁判への諸考察)。In: Complots et conjurations dans l'Europe moderne. Actes du colloque international organisé à Rome, 30 septembre-2 octobre 1993. Rome : École Française de Rome, 1996. pp. 231-250. (Publications de l'École française de Rome, 220)
- Soman Alfred. Les procès de sorcellerie au parlement de Paris (1565-1640) (パリの高等法院における魔法裁判 -1565年 -1640年)。In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 32^e année, N. 4, 1977. pp. 790-814;
- Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り)。In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. pp. 177-217
- Surget Eric. Le Roi à la Rochelle et le Diable à Niort : le procès de la maladie prodigieuse de Pierre Creusé (1628) (La Rochelle に訪問する国王と Niort に訪問する悪魔。Pierre Creuse の驚異的な病気をめぐ る 裁 判 -1628年)。In: Albineana, Cahiers d'Aubigné, 21, 2009. Démons, sorciers et diableries au temps d'Agrippa d'Aubigné. pp. 161-200
- Utz Tremp Kathrin. Les vaudois de Fribourg (1399-1430) : état de la recherche (Fribourg の Vaudois 異端者 (1399-1430年) に関する先行研究の現状)。In: Revue de l'histoire des religions, tome 217, n° 1, 2000. Les vaudois. pp. 121-138
- Zorzi Andrea. Aspects de la justice criminelle dans les villes italiennes à la fin du Moyen Age (イタリアの諸都市においての中世

末期の刑法師司法制度の状況について). In: *Déviance et société*. 1991
Vol. 15 - N° 4. pp. 439-454

スペインインクイジションとその他のインクイジション裁判

- Alberro Solange Behocaray. Inquisition et société : rivalités de pouvoirs à Tepeaca (1656-1660) (社会とインクイジション裁判。Tepeacaにおける権力闘争・1656-1660年). In: *Annales. Economies, sociétés, civilisations*. 36^e année, N. 5, 1981. pp. 758-784
- Amiel Charles. Crypto-judaïsme et Inquisition. La matière juive dans les édits de la foi des Inquisitions ibériques (インクイジションと隠れユダヤ教徒。イベリア半島のインクイジション裁判の信仰発令におけるユダヤ教記載について). In: *Revue de l'histoire des religions*, tome 210, n° 2, 1993. pp. 145-168
- Balancy Élisabeth. L'Inquisition devant le miroir (1562-1648) (スペインインクイジションをめぐる・1562年から1648年まで). In: *Mélanges de la Casa de Velázquez*, tome 27-2, 1991. Epoque moderne. pp. 29-57
- Bataillon Marcel. Honneur et Inquisition: Michel Servet poursuivi par l'Inquisition. (インクイジション裁判と名誉。インクイジション裁判に告訴された Michel Servet について) In: *Bulletin Hispanique*, tome 27, n° 1, 1925. pp. 5-17
- Baudot Georges. La population des villes du Mexique en 1595 selon une enquête de l'Inquisition (インクイジションの捜索によって知られている1595年のメキシコの町々の人口について). In: *Cahiers du monde hispanique et luso-brésilien*, n° 37, 1981. pp. 5-18
- Bennassar Bartolomé. Aux origines du caciquisme : les familiers de l'Inquisition en Andalousie au XVII^e siècle ? (酋長制度の起源・17世紀のアンダルシアにおけるインクイジションの奉仕官について). In:

Cahiers du monde hispanique et luso-brésilien, n° 27, 1976.
Hommage à Paul Mérimée. pp. 63-71

- Bennassar Bartolomé. Un phénomène historiographique : l'accélération des recherches sur l'Inquisition espagnole ; enjeux et débats. (歴史学史上の現象。スペインインクイジションに関する研究の増加。現状と展望) In: Histoire, économie et société, 1983, 2^e année, n° 3. pp. 367-373
- Beyer de Ryke Benoît. Albaret (Laurent). L'Inquisition, rempart de la foi ? (Alabarer 著『インクイジション裁判、信仰の盾なのか?』). In: Revue belge de philologie et d'histoire, tome 78, fasc. 2, 2000. Histoire medievale. moderne: et contemporaine - Middeleeuwse, modhrnf en hedendaagse geschiedenis. pp. 628-629
- Birckel Maurice. Le P. Miguel de Fuentes, S. J., et l'Inquisition de Lima (Lima のインクイジション裁判と Miguel de Fuentes 神父 [イエズス会員]). In: Bulletin Hispanique, tome 71, n° 1-2, 1969. pp. 31-139
- Carrasco Raphaël. Morisques et Inquisition dans les îles Canaries (カナリア諸島におけるモリスク [元イスラム教系] とインクイジション裁判). In: Revue de l'histoire des religions, tome 202, n° 4, 1985. pp. 379-387
- Carvacho René Millar, Dedieu Jean-Pierre. Entre histoire et mémoire. L'Inquisition à l'époque moderne : dix ans d'historiographie (歴史と記憶の間に。近代期におけるインクイジション。10年間の学史を振り返る). In: Annales. Histoire, Sciences Sociales. 57^e année, N. 2, 2002. pp. 349-372
- Cavaillé Jean-Pierre. L'art des équivoques : hérésie, inquisition et casuistique. Questions sur la transmission d'une doctrine médiévale à l'époque moderne (曖昧さを取り扱う。異端、インクイジションと

- 決疑論。近代期においての中世期論の継承をめぐって)。In: *Médiévales*, n° 43, 2002. Le bain : espaces et pratiques. pp. 119-145
- da Silva Gérard. La ferveur secrète des marranes du Portugal (ポルトガルにおける隠れユダヤ教徒の秘密の熱心さ)。In: *Hommes et Migrations*, n° 1140, février 1991. Voyage au bout de la vie. pp. 53-55
- Dedieu Jean-Pierre. L'Inquisition et le Droit: analyse formelle de la procédure inquisitoriale en cause de foi (インクイジション裁判と法学。信仰犯起訴における起訴様式の形式上の分析)。In: *Mélanges de la Casa de Velázquez*, tome 23, 1987. pp. 227-251
- Défourneaux Marcelin. Molière et l'Inquisition espagnole (スペインのインクイジションとモリエール)。In: *Bulletin Hispanique*, tome 64, n° 1-2, 1962. pp. 30-42
- Erhard Jean. Montesquieu et l'Inquisition (モンテスキューとインクイジション裁判)。In: *Dix-huitième Siècle*, n° 24, 1992. Le matérialisme des Lumières. pp. 333-344
- Escamilla-Colin Michèle. Crime et châtements dans l'Espagne inquisitoriale. Essai de typologie délictive et punitive sous le dernier Habsbourg et le premier Bourbon (インクイジション裁判のスペインでの犯罪と刑罰。Habsbourg 朝の最後の王とブルボン朝の最初の王にわたる時代におけるの刑罰・犯罪類別の試み)。In: *Histoire, économie et société*, 1991, 10^e année, n° 3. Prières et charité sous l'Ancien Régime. pp. 429-435
- Escamilla-Colin Michèle. L'Inquisition espagnole et ses archives secrètes (XVe-XVIe siècles) (スペインインクイジションとその秘密資料・15-16世紀)。In: *Histoire, économie et société*, 1985, 4^e année, n° 4. pp. 443-477
- Flechniakoska Jean-Louis. Spectacles religieux dans les « pueblos » à travers les dossiers de l'Inquisition de Cuenca (1526-1588) (Cuenca

- のインクイジションの資料から見とれる村井におけるの宗教的な諸演技について・1526-1588年). In: Bulletin Hispanique, tome 77, n° 3-4, 1975. pp. 269-292
- Le Brun Jacques. Autorité doctrinale, définition et censure dans le catholicisme moderne (Notes critiques à propos de : Bruno Neveu, L'erreur et son juge. Remarques sur les censures doctrinales à l'époque moderne, Naples, 1993) (近代カトリックにおける教義的権威、定義と検閲). In: Revue de l'histoire des religions, tome 211, n° 3, 1994. pp. 335-343
- Le Flem Jean-Paul. Les Morisques du Nord-Ouest de l'Espagne en 1594 d'après un recensement de l'Inquisition de Valladolid (1594年におけるスペイン北西のイスラム系の人々。Valladolidのインクイジションの調査を中心に). In: Mélanges de la Casa de Velázquez, tome 1, 1965. pp. 223-243
- Lerner Michel-Pierre. Le protestantisme vu par Tommaso Campanella (Tommaso Campanellaのプロテスタント主義観). In: Revue d'histoire et de philosophie religieuses, 58e année n° 2, 1978. pp. 163-191
- Maldavky Aliocha. Itinéraires des nouveaux chrétiens à Lima. Le procès de Manuel Bautista Pérez et la « grande complicité » (1635-1639) (Limaにおける新キリシタンの数人の事例。Manuel Bautista Pérezの裁判と「大共犯」). In: Caravelle, n° 74, 2000. pp. 41-59;
- Merlo Grado Giovanni. Coercition et orthodoxie : modalités de communication et d'imposition d'un message religieux hégémonique. (強制と主流。覇権的な宗教的なメッセージの押し付けと宣告方法について) In: Faire croire. Modalités de la diffusion et de la réception des messages religieux du XIIe au XVe siècle. Actes de table ronde de Rome (22-23 juin 1979) Rome : École Française de Rome, 1981.

- pp. 101-118. ((Publications de l'École française de Rome, 51);
- Molinie-Bertrand Annie. L'Inquisition et les Cryptojuifs (1660-1730) (インクイジション裁判と隠れユダヤ教徒-1662-1730年). In: Histoire, économie et société, 1991, 10^e année, n° 3. Prières et charité sous l'Ancien Régime. pp. 423-427
- Munoz Calvo Sagrario. Deux guérisseurs français inculpés par l'Inquisition espagnole au XVII^e siècle (フランス人の二人の民家療法師は17世紀においてスペインインクイジションによって容疑される). In: Revue d'histoire de la pharmacie, 63^e année, n° 226, 1975. Communications du congrès international d'histoire de la pharmacie de Paris (24-29 septembre 1973) pp. 485-490
- Redondo Augustín. Fernando de Rojas et l'Inquisition (インクイジション裁判と Fernando de Rojas). In: Mélanges de la Casa de Velázquez, tome 1, 1965. pp. 345-347
- Romeo Giovanni. Confesseurs et inquisiteurs dans l'Italie moderne : un bilan (近代期のイタリアにおける聴罪司祭とインクイジター). In: Revue de l'histoire des religions, tome 220, n° 2, 2003. pp. 153-165
- Saraiva Antonio José. L'Inquisition portugaise et les « nouveaux chrétiens » (ポルトガルのインクイジション裁判と「新しいキリシタン」). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 22^e année, N. 3, 1967. pp. 586-589
- Tallon Alain. Le concile de Trente et l'Inquisition romaine (トレント公会議とローマのインクイジション裁判). À propos des procès en matière de foi au concile. In: Mélanges de l'École française de Rome. Italie et Méditerranée, tome 106, n° 1. 1994. pp. 129-159
- Tellechea Idígoras J. Ignacio, Wagner Christine. Profil théologique du protestantisme castillan du XVI^e siècle. Un mémorial inédit de l'Inquisition (1559) (16世のカスティーリャにおけるプロテスタント

- 主義の一般像。初めて発見されたインクイジションの調査報告書
-1559年)。In: Revue d'histoire et de philosophie religieuses, 63e année
n° 1-2, Janvier-juin 1983. Luther et l'Europe. pp. 125-140;
- Vauchez André. Le Credo, la Morale et l'Inquisition (信経、道徳と
インクイジション裁判). In: Archives de sciences sociales des
religions, n° 35, 1973. pp. 184-185
- Wagon M. Jean de Boulogne, sculpteur douaisien, dénoncé à
l'Inquisition comme hérétique en 1589 (1589年、Douaisの彫刻家、
Jean de Boulogne氏がインクイジション裁判に密告された案件). In:
Revue du Nord, tome 20, n° 78, mai 1934. pp. 89-92
- Wagner Christine. L'Inquisition de Tolède face au protestantisme au
XVIe siècle (16世紀においてのトレドのインクイジション裁判とプ
ロテスタント主義). In: Revue d'histoire et de philosophie religieuses,
74e année n° 2, Avril-mai-juin 1994. pp. 153-169

公開された講演

- *ヴォルテールという詐欺師（前編・中編・後編）L'imposture
Voltaire Marion Sigaut より <https://youtu.be/Y36n7JGitA0>。
- *Toulouseでの公演、「魔女狩りとインクイジション」、Marion Sigaut
より <https://www.youtube.com/watch?v=DdSdQaaq6nM>
- *「魔女についての真相」、パリでの公演、2015 Marion Sigaut より
<https://www.youtube.com/watch?v=HksaIq8-34Y&t=3s>

注

- 1 一つの好例は、モーラスとアクション・フランセーズに関する少ない紹介書だろう。
- 2 また、ドイツ系の学問の影響力も関係すると思われる。というのも、昔からドイツのプロテスタントの影響も強く、中世期、カトリックへの否定の伝統は長い

え、ルネサンスなどを美化する傾向が強い。

- 3 フランスに関して、非常に少ないとみられる。『魔女狩りと悪魔学』（人文書院）の336ページ以降の数ページぐらい大まかに書かれるぐらいである。その中でも本研究において取り上げる A. ソーマンの研究が指摘されているものの、「〈魔女狩り〉においてフランスでは女性は少数派を締めていた」というソーマンの一番重要な発見については全く言及されていないのは好例であろう。
それ以外、あちこちにミュシャブレッドが取り上げられるぐらいである。
- 4 「これらの史料を集めたが、博士論文の材料としては歴史的価値・学術的価値が低いと判断し、論文として取り上げることはやめた。しかし読み物として面白いので編集にまとめたという」（『思想』の100ページ、谷口）。で、谷口氏はその本に基づいて作成された論文になるのだが、現地の学界は然りとした研究として受け入れていないことからわかるように歴史的な実態を把握するためにはかなり物足りないと思われる。
- 5 『魔女狩りとキリスト教』（上山安敏）、『魔女裁判』（牟田和男）などは多々ある。
- 6 歴史学者たちがこのような継続性を否定しているものの、20世紀に入ってからのフェミニズム運動を支えた Margaret Murray という社会学者が打ち出した仮説はいまだに粘りつよく歴史事実であることが信じられている。後で脚注でそれについて触れるが、すでに次のことが言えよう。戦前日本において、神武天皇の創業に倣い、「古神道」は古より綿々と続いて現代に至る、といった発想にちかいかもかもしれない。神話としていいのだが、歴史事実との乖離はかなりある。
- 7 カトリックという言葉は「普遍」という意味なので、カトリック教会を称して、「公教会」と伝統的に訳すのである。公なる教会として、公のために尽くし、普遍であるとされている所以である。便宜上、カトリック教会を指すため、「公教会」という表現を使うことにした。
- 8 たとえば、ヴォルテールという詐欺師（前編）L'imposture Voltaire Marion Sigaut より <https://youtu.be/Y36n7JGitA0>。あるいは、Toulouse での講演、「魔女狩りとインクイジション」、<https://www.youtube.com/watch?v=DdSdQaaq6nM> 文献・論文を網羅的に見た限り、「魔女」という告訴でカトリック教会が女性を裁いた事例は出ていない。バスク地方においてスペインインクイジション（教会管轄ではなく、国家管轄の裁判所）によっていくつかの事案で裁かれたくらいである。いずれにせよ、スペインでインクイジションの陰でスペインでは魔女狩りは蔓延せず、その現象は殆ど確認されていない。また、スペイン・インクイジションは世俗裁判である。スペイン・インクイジションについて、本論の後半部分に

- 紹介している。
- 9 以上は Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition), Kontre Kulture, 2014に沿って紹介されたもの。
 - 10 20世紀においても続く。詳しい分析は Lafon Jean-Marc. Cendres et émeraudes : le catharisme romanesque au XXe siècle (灰と翠玉、20世紀の文藝におけるカタリ派) . In: Annales du Midi : revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale, Tome 115, N° 242, 2003. pp. 261-282を参照。面白いことに、それぞれの時代背景に沿って多くの小説の中身も変わってくる。反教権的なものもあれば、時代によって教権的な小説もある。歴史と関係ないものもあれば、歴史的に面白いものもある。
 - 11 **魔女像の系統の紹介世間** で浸透してきた魔女に関する神話の形成を探ると、フランスの場合、三つの名前が浮かんでくる。似非歴史家の Jules Michelet、革命期の Lamothe-Languon (記者であり、書いた行数で給料をもらい、あえて売るために拷問の場を想像に任せて描写することによって商売していた。彼の弊は次の通りである。本物の資料に基づきながら、これらを改竄し、あるいは違う場と時に実際にあった事例を取って、その時代、当事者、場所を変えて事実を偽っていた。例えば、16世紀の民族裁判資料に拾った拷問の場面を13世紀にあったと決めつけて、また聖職者によってなされたといったような偽事例を作り上げた。要するに、部分的に実際にあった事例の部分を勝手に時代と当事者を変えて、また想像に任せて詳細を増やし、部分的に作り上げて、書いていったパターンだった。こういった改竄のしかたは珍しくて、歴史学における典型的な例である)、それから人類学者 (歴史家ではない) Margaret Murray (迫害されている優しい魔女という神話を歴史的な根拠なしで作り上げ、その後のフェミニズムへ影響した) もいる。
 - 12 このような作り話の起源に関する経緯も興味深い。Michelet を引き継ぐ系統は強い。Michelet は『魔女』(和訳もあり) という本を書いたが、そこに描かれているのは歴史ではなく幻想に過ぎないが、何の参考文献や一次資料は一つも利用されていないのに権威のある歴史家としてこの著作の記述は長く引き継がれた。例えば、Muchembled Robert 氏の研究を参照するとその事態が明らかになる。面白いことに、Muchembled Robert 氏はどちらかという反教権的な側面が強いが、それでも史実と関係ない Michelet を引用するわけがないと暗に彼がほめかしている。またその研究の成果は「魔女狩り」という現象は上から (とりわけカトリック教会から) 押し付けられたような虐殺でもなんでもなく、国民に深く根を下ろした迷信の結果である現象だと Muchembled Robert 氏は証明する。そ

れから、多くの場合、権威が欠如していた地域で大衆が狂ってくるかのように「スケープゴート、リンチ」というような現象で弱い者を犠牲にした。まさにリンチ。 Muchembled Robert Sorcellerie, culture populaire et christianisme au XVIIe siècle, principalement en Flandre et en Artois (Flandre と Artois 地方を中心に 16世紀における魔法、民族文化とキリスト教について) . In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 28^e année, N. 1, 1973. pp. 264-284; 次の引用には、フランスの70年代の「フェミニズム (女性主義)」や「共産主義」や「実存主義」などの影響を強く感じる文章である。つまり、Michelet によって作られた魔女像を検討なしそのままに引き継ぐ、すなわち魔女を迫害している社会によって圧殺される差別された可哀そうな女性という存在だという印象を与えるために Michelet が利用された。問題はこれらは歴史ではなく政治だった。p.264-265 « Nous connaissons surtout la sorcellerie réprimée, et nous l'analysons volontiers comme un « crime » contre la société 2. A la suite de Jules Michelet, certains auteurs nomment encore la sorcière « fille de la misère », et en font une révoltée sociale 3. D'autres nuancent ce point de vue en qualifiant les sorciers de refoulés sociaux 4. Pourtant, la sorcellerie ne me paraît pas, avant le dernier tiers du xvie siècle, une étrangère ou une intruse. Au contraire, elle me semble être profondément enracinée dans les mentalités et traduire, avec les récurrences du paganisme, avec ce que les élites ou simplement les ecclésiastiques nomment « superstitions », un niveau de culture, un type d'adéquation au monde plus proche de la « pensée sauvage » des ethnologues que de notre mentalité. Aussi, afin de rendre au phénomène une certaine autonomie, ai-je tenté de l'analyser avant la répression, en l'étudiant dans la première moitié du xvie siècle, à l'aide de renseignements fournis par les spécialistes du folklore 5 et puisés dans deux recueils de sermons du Nord de la France 6. »

アフリカで現代における魔術犯の事例 面白いことに、現代でも魔法裁判などはアフリカにおいて存在することも確認されている。Geschiere Peter. Sorcellerie et modernité. Les enjeux des nouveaux procès de sorcellerie au Cameroun. (魔法と近代性。現代カメルーンにおける新しい魔法裁判の行方について) In: Annales. Histoire, Sciences Sociales. 53^e année, N. 6, 1998. いわゆる占い、祈禱師というか、そういった呪いの世界は現代でも存在して、アフリカのカメルーンではその影響力もいまだに強くて、「呪縛」ということで告訴される案件も80年代から確認されている (以前は植民時代とカトリック教会が強かった時代、一時的にこういっ

た「呪縛」の案件はなくなっていたのに、独立後になって復活したということになる）。

また、古代ローマにおいても魔法は社会問題となったことも確認されている。Le Glay Marcel. Magie et sorcellerie à Rome au dernier siècle de la République (古代ローマの共和国末期における魔法と魔術について)。In: L'Italie préromaine et la Rome républicaine. I. Mélanges offerts à Jacques Heurgon. Rome : École Française de Rome, 1976. pp. 525-550. (Publications de l'École française de Rome, 27)

- 13 現代ドイツでの地域においては、1700年以降でさえまだ魔法で裁かれる事案があるとされている。
- 14 ちなみに、古代・中世・近代という通常の時代区分でさえ、「近代的な歴史観」が醸し出した区分であると言えよう。Jean-Marie Carbasse, Manuel d'introduction historique au droit (法学への歴史的な入門書), PUF, Paris, 2013, p.91 et sq

例えば、中世期といっても、千年に亘る期間なので、その千年を同一視することも、到底あり得ないことであり、ニュアンス無しに中世期を暗黒時代にレッテル付けること自体は、どれだけ怪しいか、明白だろう。実際、中世は暗黒な時代だったどころか、欧州における一番栄えた時代だった。この課題について他の論文に譲ることにする。

- 15 当時の空気を知るには、次の通説的な論文を参照。Delumeau Jean. L'Édit de Nantes dans son contexte historique (当時の歴時事情におけるの Nantes 王令) . In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 142^e année, N. 4, 1998. p.1068 «Luther, à la Noël 1524, fit interdire à Wittenberg la messe catholique par les autorités civiles et, l'année suivante, il écrivait à son ami Spalatin : « Les princes doivent réprimer... les crimes publics, les parjures, les blasphèmes du nom de Dieu. » La messe faisait partie de ces blasphèmes. Mélancton, qui avait été le principal collaborateur de Luther, félicita Calvin pour la condamnation de Servet. Vingt ans avant la naissance du protestantisme, l'humaniste florentin Marsile Ficin s'était déchaîné contre Savonarole, écrivant après l'exécution de celui-ci sur le bûcher : »
« Élargissons encore le panorama. L'époque qui a vu naître le protestantisme a été traversée par plusieurs peurs qu'il importe de regrouper pour comprendre les violences de l'époque. Le terme de « Renaissance » est, certes, pertinent à

plusieurs titres. Mais il a tout de même l'inconvénient de ne pas diriger le regard vers les angoisses du temps, qui furent nombreuses et importantes. Culminèrent ensemble — et ce n'est pas un hasard — la peur de l'hérétique et des nouveautés, celle des blasphémateurs susceptibles d'attirer la colère de Dieu sur les communautés auxquelles ils appartenaient, et encore la peur des sorciers et sorcières, celle des juifs et celle de Turcs. »

以上の引用の総意。多くの脅迫、恐怖の多い時代だとして「ルネサンス」が描かれている文章である。それは忘れがちな現象ではあるが、いわゆる近代期「ルネサンス」、宗教改革の勃発などという時代は、前代未聞の恐怖・迷信・迫害の時代だった。

p.1069 « A partir de la Peste Noire de 1348 les peurs que j'énumérais tout à l'heure allèrent en s'aggravant dans la chrétienté latine, connaissant leur apogée dans la seconde moitié du XVIe siècle et au début du XVIIe. Elles diminuèrent ensuite toutes ensemble à partir de 1648, date de la paix de Westphalie qui, à l'échelle européenne, mit fin aux guerres de religion. »

« Ces attentes eschatologiques expliquent plusieurs faits importants du XVIe siècle, et, d'abord, que les grands Réformateurs n'aient pas cherché à se réconcilier avec le pape qu'ils regardaient, au sens strict du mot, comme l'« Antéchrist ». Il ne fallait surtout pas pactiser avec Babylone, c'est-à-dire Rome. »

- 16 Norman Cohn 歴史家によれば、徹底的な、全欧州を対象にしている研究はいまだ存在せず、この現象の最もあった地域別にだけ、徹底的な搜索は行われたが全体図を調べた研究はまだ存在しない。私は調べた論文の範囲を見る限り、その通りになってはいる。

また、例えば Muchembled Robert. L'autre côté du miroir : mythes sataniques et réalités culturelles aux XVIe et XVIIe siècles(神話を超えて。16・17世紀におけるサタン神話と文化的な現実について。)。In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 40^e année, N. 2, 1985. pp. 288-305

次の引用には、魔女狩りは研究上の成果によると、研究家なら共通する通説として、カトリックと関係ない現象だとされている。p.294 «La construction démonologique mélange intimement de pures obsessions des élites européennes auxquelles Norman Cohn a fait un sort et des fragments de la réalité sociale et culturelle populaire Seuls ces derniers me retiendront ici

Ils n'ont rien voir avec un culte non chrétien organisé même résiduel ou

mythique (【これらの偏執的な悪霊に対するエリートの実験は】古より生き残った異教の礼拝の痕跡とは全く関係ない。) Du moins n'est-il pas possible à mon sens de formuler de telles questions aventureuses sur l'origine des pratiques et des croyances en question : faux problème, s'il en est, après un millénaire de christianisme et au minimum de syncrétisme entre les anciennes traditions païennes et celles des catholiques » 要約すると、魔女や悪魔・悪霊への礼拝などは、キリスト教化以前の異教かた引き継がれていないと強調している論文である。

- 17 Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition), Kontre Kulture, 2014, p.11と Jean Sévilla, 画期的な闘士なる著作叢 (Ecrits Historiques de combat - Historiquement incorrect), Perrin, Paris, 2016, p.90 (Pierre Chaunu による)。
- 18 フランスにおける Louviers 事件と Loudun 事件 (1610年)。
- 19 魔女像の起源を紹介する 優しいイメージというのは、「魔女の多急便」のような一般人向けの小説や動画を通じてかなり広まっている。

15世紀中葉のアルプス 山脈 いわゆる「サバト」(悪魔への礼拝、悪魔を拝む集まり)の起源に関して、早く遡っても15世紀に初めてサバトという表現が見られる。しかも、サバトの起源は先行研究で明らかにされて明白に確認されている。15世紀の中葉、アルプス山脈の地方において、幾つかの魔法案件が出た結果、魔法に関する書籍が出版されて、これらの書籍は近世になってから法律家や教養人などによって一般的に参照されるようになる。大事なものはそれらの書籍は聖職者によるものでも、教会によるものでもなく、世俗者が魔法案件の裁判に当たって証言を記録するという形で書き記した本であった。また対象は魔術師だったということで、女性ではなく主に男性だった。また、その15世紀における裁判を見ると、あくまで悪魔を礼拝するという異端裁判として位置付けられており、常識的に考えるとそういったサバトといった犯罪が実際にそこであっただろう。そうではないと、当時の限られた地域に、限られた案件にかかわる「魔法」を問題視しないで「異端」を裁いたそれらの裁判はわからない。言い方を変えると、15世紀中葉のアルプス山脈の幾つかの異端審問において、捜査の結果、サバトという新しい悪魔的な儀礼が確認されたに過ぎなくて、記録に残った。がそれをさばくためでもなくて、「たまたま」に裁判のついでに確認された儀礼だった・老婆に対する案件数の増加は15世紀末期からである。要するに、15世紀のアルプス山脈の魔法案件の書物は直接に異端審問という制度と関係ないところに成立して、そして

あえていえば「たまたま」このような数少ない案件について記録が傍観者によって書き記されて、次の世紀に入ってから、無断に世俗社会のエリートに浸透した。言いかえると、15世紀中葉における異端審問の際、その次の時代のサバト像に近い「悪魔宗」が実際に確認された。そして、異端として裁かれたが、魔女としてということにはなかった。まさに、その時、異端審問だったから、何も度を越えなかったことすらいえない（下の太字の部分を参考）

魔法犯は条文上に16世紀まで存在せず、異端罪と悪魔懸かり罪のみ また、インクイジション裁判、つまり異端審問と関係ない魔法に関する書物である。「言い伝え」レベルでのサバトに関する噂を書き記したことに過ぎない。15世紀の実際にあった裁判の案件の書類を調べると、11世紀の Episcopi 勅令に基づいて裁かれていた。魔法は関係ない。その勅令は多くの異端を並べて、その内に悪魔礼拝といったような異端についての規定に基づいて裁かれた。

魔術に関する書物の系統の紹介 以上の魔術に関する著作は1440年ごろの『Fornicarius』、『Errores gazorium』と Claude Tholosan の論文がある。以下を参照（一番纏まった論文からの引用。他に、Ostorero Martine. Itinéraire d'un inquisiteur gâté : Ponce Feugeyron, les juifs et le sabbat des sorciers (恵まれたインクイジション裁判官の歩み。Ponce Feugeyron とユダヤ人と魔術師のサバト). In: Médiévales, n° 43, 2002. Le bain : espaces et pratiques, pp. 103-117)

また、悪魔などについての資料でいうと、Pierrette Paravy, A propos de la genèse médiévale des chasses aux sorcières : le traité de Claude Tholosan, juge dauphinois (vers 1436) (魔女狩りの中世末期における起源について。Dauphinois 地方の司法官、Claude Tholosan の論文 -1436年ごろ) , p.334を参照。悪魔に関する文献として、一番早い時期の文献は 1376年の『directorium inquisitorium』（インクイジション裁判官への指示）が存在する。が、この文献は以前の公会議の教会法から一歩も出ず、「魔術師」あるいは「魔法」などという用語はまったくなくて、Episcopi 勅令に沿っているだけである。つまり、サタン礼拝に関する規定が一つあるぐらい、ついでに記されているぐらいの文献である。また、このような悪魔に関する話について、幻想が多いため、「悪魔・サタンに関する証言を信頼しないように」、つまり、このような証言があっても、「証拠効果がないように」と1376年の『裁判官への指示』において明記されている。それから、近代期になる直前、1486年の『Malleus maleficarum』という本において魔法という課題だけを取り扱っており、まさに16世紀の雰囲気を予兆するような感がある。要するに、魔女狩りという狂気の沙汰はむしろカトリック教会と異端審問がなくなって、弱

くなっていた時期に初めて流行したということになる。

Ginzburg Carlo, Bonan Elsa. Présomptions sur le sabbat (サバトに関する考察) .
In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 39^e année, N. 2,1984. pp p.342 « L' image du sabbat se précise donc dans les Alpes occidentales vers le milieu du xve siècle un demi-siècle avant la date proposée traditionnellement par les chercheurs Mais la séquence lépreux/juifs juifs/sorcières qui ressort de cette reconstruction est beaucoup plus importante que le choix une datation plus haute. »

Paravicini Bagliani Agostino, Ostorero Martine. La genèse du sabbat (サバトの起源) . Autour de l'édition critique des textes les plus anciens. In: Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 144^e année, N. 1, 2000. pp. 73-85

« Le 30 juillet 1438, un jeune homme d'Epesses, dans le Canton de Vaud actuel, Aymonet Maugetaz, se présente en larmes devant l'inquisiteur dominicain de Lausanne pour demander l'absolution de ses péchés¹. Il était âgé d'environ 20 ans. Entendu en tribunal, il raconte que cinq ans auparavant, son père l'avait fait monter derrière lui sur un poulain noir qui les entraîna à vive allure jusqu'à Bâle ; là, ils rejoignirent un groupe de plus de cent hommes et femmes réunis autour du diable, qui apparaissait tantôt sous une forme humaine, tantôt sous celle d'un chat noir. Le diable demanda à Aymonet de renier Dieu et tous les sacrements de l'Église, en échange de quoi il lui donna une petite somme d'argent. Aux flammes bleues des bougies, tous mangèrent des nourritures inconnues et burent abondamment, puis ils s'accouplèrent les uns aux autres. Une autre fois, son père et d'autres hommes le conduisirent près de l'embouchure du Rhône, où ils entrèrent dans une maison et tuèrent un petit enfant dont ils emportèrent le cadavre. Un autre jour, toute la « secte » se réunit sur une montagne de la Gruyère pour casser de gros blocs de glace avec des pics de fer. Vint alors un gros nuage noir qui éleva tous ces petits morceaux de glace dans l'air et les transporta au-dessus de Vevey: une forte tempête s'abattit alors sur la ville et les récoltes. L'inquisiteur n'interrogea pas davantage Aymonet ; touché par le repentir du jeune homme, il lui laissa la vie sauve². Ces témoignages proviennent du plus ancien procès conservé qui puisse être relié de manière précise à l'un des premiers textes décrivant le sabbat des sorciers

et des sorcières, les *Errores gazariorum*³. »

p.74 « Entre le procès intenté contre le jeune homme d'Épesses et les *Errores* il y a donc bien des points communs. Un détail atteste même d'un lien direct entre ces deux témoignages : les *Errores* aussi racontent que les sorciers provoquent des tempêtes en cassant des blocs de glace sur les montagnes, et situent l'action à Vevey. »

p.75 « Les liens existant entre le procès de 1438 et les *Errores* d'une part, ainsi que les contextes géographiques auxquels renvoient les textes de Frund et de Nider avaient commencé à intriguer l'équipe de jeunes chercheurs lausannois qui étaient en train de publier, sous ma direction, les procès de sorcellerie du XV siècle vaudois⁶, je veux parler avant tout de Martine Ostorero, qui a étudié, en particulier, le procès de 1438, de Catherine Chêne, qui prépare une thèse de doctorat sur le *Formicarius* de Jean Nider, à partir d'une édition critique cette oeuvre fondamentale pour l'histoire de la genèse du sabbat, et de Kathrin Utz Tremp. »

p.76 « C'est entre 1428 et 1430 que Hans Friind⁸ écrit son Rapport sur des poursuites menées à la même époque en Valais. C'est entre 1436 et 1438 que Jean Nider rédige ou finit de rédiger son *Formicarius* ; le fait qu'il ait vécu à Bâle entre 1429 et 1434-1435, époque où il a pu rencontrer ses deux principaux informateurs, à savoir l'inquisiteur d'Autun et le juge bernois Pierre, permet de supposer que c'est durant ces années-là que le dominicain viennois « apprend » le sabbat. Les dates qui se dégagent de la tradition et de l'analyse textuelle des *Errores gazariorum* et du traité de Claude Tholosan suivent de près celles qui concernent Jean Nider: le traité de Claude Tholosan a été rédigé vers 1436; les *Errores*, soit avant 1437 (version V), soit après 1438 (version B). Composé entre 1440 et 1442, le *Champion des Dames* de Martin Le Franc est le seul de nos textes à appartenir à une nouvelle décennie¹⁰ »

p.77 « Sur le plan géographique une conclusion à première vue surprenante semble s'imposer d'elle-même : à un titre ou à un autre, nos textes renvoient à une géographie du sabbat qui comprend le Val d'Aoste, le territoire de Berne, le diocèse de Lausanne (et en particulier le décanat de Vevey), le Valais, et, bien sûr, les vallées du Dauphiné. Il s'agit d'une géographie du sabbat remarquablement homogène, qui est essentiellement alpine. » 「サバトの地理的

な起源でいうと、魔法に関して書いた作者の全員が Vale d'Aoste、Berne 領地、Lausane 教区、Valais 地方と Dauphine の山谷とかかっていたことが分かる。その地方においてこそ、悪魔懸き容疑の幾つかの有名な裁判が起きた。当時の教会にとって、数世紀前、その地域に強かった Vaudois 異端（ある種の二元主義の異端）の痕跡のようなものに過ぎないとらわれていた（p.85参照）。」

サバト像の由来 裏を返せば、15世紀の異端審問は異端を裁いた審問であって、基本的にその次の時代の魔女狩りと異質のものであることは明らかである。「サバト」という像がアルプス山脈に由来していることは史実であるが、これは異端審問と教会と関係ない。その次の時代になってから、世俗裁判の司法官によって、このようなサバト像が利用されるようになったということである。

p.78 «Le 17 octobre 1440, lors du procès civil intenté contre Gilles de Rais¹⁵, le prêtre Eustache Blanchet raconta que deux ans auparavant, alors qu'il cheminait entre la Bretagne et Rome, il avait traversé les terres de Bourgogne et de Savoie, des régions où, disait-il, pullulait un grand nombre d'hérésies ; il avait entendu dire, et même vu de ses propres yeux, que là-bas plusieurs «vieilles femmes » avaient été pendues en raison de ces hérésies, et surtout parce qu'elles invoquaient le démon. »

p.79 « Frund est un laïc qui sait manier l'écriture et a exercé la charge de greffier dans les chancelleries de Schwytz et de Lucerne. Fründ décrit la secte du sabbat comme étant un danger pour la Chrétienté, mais dans l'ensemble, ses préoccupations ne sont pas pastorales ou théologiques. Son argumentation est éminemment politique, comme l'étaient à ses yeux les causes des agissements des patriotes valaisans contre les sorciers et les sorcières. Laïc comme Hans Friind, Claude Tholosan est le seul parmi nos auteurs dont on peut dire qu'il a à son actif une longue expérience judiciaire contre les sorciers, puisqu'il a été longtemps juge-mage au service du roi de France dans le Dauphiné. Hans Fründ et Claude Tholosan -- tous les deux laïcs — s'intéressent au sabbat pour des raisons qui ne sont que très indirectement liées à la défense de la foi. Seulement pour »

« Seulement pour le ou les auteurs des *Errores gazariorum* nous pouvons avancer l'hypothèse d'une relation certaine entre la genèse d'un des textes de notre corpus et une activité inquisitoriale (dominicaine). Le dominicain Jean Nider a eu des liens avec l'Inquisition, l'un de ses informateurs étant l'inquisiteur

d'Autun; mais il n'a pas lui-même exercé une activité inquisitoriale ; il semble même accorder plus d'intérêt aux témoignages que lui offre son deuxième informateur, le juge bernois laïc Pierre ! Quant à Martin le Franc, la lecture misogyne du sabbat l'emporte sur toute autre considération pastorale ou théologique »

p.80 « La vision du sabbat que nos auteurs s'efforcent de nous décrire est loin d'être homogène. De fait, nous devrions parler de cinq visions du sabbat, tellement les différences sont grandes et importantes. » 「これらの著作者が示しているサバトの描写には統一がない。そのどころか、これらはまちまちであり、少なくとも違う五つのタイプがあるというべきであるほどそれぞれのサバト像が違う。」

サバト像の成立 « Ce sont les Errores gazariorum qui véhiculent le concept du sabbat sous sa forme la plus structurée ; le traité est construit autour de la notion de secte, à laquelle on adhère après avoir passé un pacte avec le diable. Cette secte se caractérise par des réunions durant lesquelles les adeptes se livrent à des repas cannibales et à des orgies sexuelles (qui n'apparaissent ni chez Friind, ni chez Nider), et par la pratique systématique des maléfices dont le but est de détruire la société chrétienne. Il y est également question d'onguents ou de poudres, qui permettent aux sorciers de tuer des enfants, de commettre des maléfices et éventuellement de se déplacer dans les airs. C'est également dans les Errores gazariorum que la racine hérétique est la plus visible. Enfin, la référence à l'anti-judaïsme y est explicite : la réunion des sorciers est en effet désignée sous le nom de « synagogue ». 以上の引用の総意。『Errores gazariorum』においてこそ、サバト像の一番完成化された描写がある。また、そこに、キリスト社会を破壊する目的をもつ悪魔宗であるという見方もその著作にある。ほかの著作では (Frund, Nider) にはこういった様子はまだない。Chez Tholosan aussi, nous trouvons tous les éléments constitutifs du sabbat, qui apparaissent agencés d'une manière similaire à celle des Errores gazariorum. Bien que le vol nocturne soit considéré comme une illusion diabolique, conformément au canon Episcopi, le sabbat et l'ensemble des activités de la secte sont décrits comme des faits bien réels et perçus comme des crimes, ce qui permet de justifier l'action répressive. »

p.81 « Une certaine surprise est offerte par le Formicarius de Jean Nider, un

ouvrage dans lequel les informations relatives aux sorciers sont présentées dans plusieurs chapitres, ce qui ne favorise pas l'émergence d'une vision très structurée du sabbat. Au livre II, chapitre 4, Yexemplum évoquant le cas de la vieille qui croyait aller avec Diane introduit le thème du vol nocturne, qui est encore clairement identifié à une simple croyance superstitieuse conformément à la tradition du canon Episcopi. »

魔法犯やサバトなどはカトリックと無縁である 何も教会と関係ないことが次の文章から分かる。「La dispersion des matériaux intéressant le sabbat dans le Formicarius de Jean Nider mérite attention : il est en effet quelque peu intrigant de devoir constater que le seul dominicain de notre corpus est aussi celui dont la vision du sabbat se présente comme la moins structurée et systématique »つまり、Jean Nider の魔術師に関する著作があるが、Jean Nider はドミニコ会の修道士だったことから、また13世紀の異端審問の判事は主にドミニコ会士だったことから、無断に異端審問と魔女狩りを結びつけるために利用された系統があると。しかしながら、ドミニコ会士 Jean Nider が修道士として、また判事として書いたのではなく、傍観者として記録するためぐらいの著作にすぎない。上の引用を和訳してみよう。「Jean Nider の『Fornicarius』において、サバトに関する記載は散々しているということに注意すべき点である。というのも、魔法に関する書物の内にドミニコ会士が Jean Nider しかいないが、この Jean Nider のサバト像はどちらかという魔法に関するほかの同時代の書物の内、一番乏しくて、体系化されていないことは驚くべきことだろう。」

ちなみに、この引用の最後の部分はまさに、異端審問に対する先入観を表している。「ドミニコ会士だったから、一番魔女嫌いに決まっている」はずだったのに、実際の資料を見るとは文章が全くそうならないということが確認されているどころか、この修道士のサバト像が一番貧しく体系化されていないことがわかってくる。「Quant à Martin Le Franc, son apport essentiel est l'intrusion de la misogynie dans le discours démonologique, ce qui a pour conséquence une féminisation radicale du sabbat: même dans son rôle de champion des Dames, il ne parvient pas à vaincre le mépris que manifeste l'Adversaire à l'égard du sexe faible et en particulier des « vieilles femmes » qui ont perdu la foi. C'est une tendance qui s'affirmera cinquante ans plus tard dans le Marteau des sorcières de Jacques Sprenger et d'Henri Institoris. » 以上の引用の総意。女性嫌いという要素は、更に言うとそのあとの時代に定着していったということを確認する文章。Martin

Le Franc は初めて女性嫌いという様子を加えて、50年後の「魔女の槌」においてこそ定着化した。

『魔女の槌』はカトリック教会が推奨した「魔女保護」を証明する また、「魔女の槌」という文章は1486、ドイツに滞在していた二人のインクイジターが作成して出版する。この文章の目的は教皇への訴え、魔女を追究して、魔法使いを教会法上に有罪化するよう、要求する文章である。ちなみに、裏を返せば、教会は魔女を追求しようとしなかったことを証明する。それはともかく、教皇は以上の著作を禁書にした。つまり、カトリック教会は魔女狩りを最初から抵抗していたことを示している。

ちなみに、この「魔女の槌」はよく、カトリック教会のせいであるということに影響付けるために利用されているが（インクイジターが書いたから）実体と反することである。

p.82 «Le fait que les plus anciens textes décrivant le sabbat se réfèrent tous à des activités judiciaires antérieures, qui n'ont, comme nous l'avons vu, que très peu de liens avec l'inquisition dominicaine, est un élément qui devra encore être affiné ; retenons ici que tout porte à croire que ce sont des autorités laïques (Valais, Berne) les premières à avoir réalisé le transfert des accusations traditionnelles contre des jeteurs de sort vers des procédures judiciaires légitimées à sanctionner le sabbat. On retrouve ici une hypothèse formulée par Arno Borst¹⁷, pour qui la mise en place du concept du sabbat trouve son origine dans l'émergence de nouveaux pouvoirs : ainsi, au moment où éclataient les premières affaires de sorcellerie, la région alpine, et en particulier le Simmental, vivait d'importants bouleversements politiques et économiques. »「以上に見たように、サバトを描く一番古い文章は、さらに古い裁判案件を参照にして、ドミニコ修道会の異端審問との関係はほとんどない。。。。」続いて、むしろ、呪縛する人々に対する起訴は世俗権力の台頭に伴ったという仮説の紹介もある。（Arno Borst）

- 20 魔法犯で死刑に処された女性は低い割合と刑事訴訟全体の女性割合との比較 ちなみに、四割というのは高い数字である。次の脚注の引用を参照。魔女狩り以前の16世紀の裁判事件において、通常、全体の案件数の内に、女性が15%ぐらいだけの案件とかかわっている。要するに、平均して、裁判にかかる割合として男性の方が圧倒的に多いということの意味する（85%）。この意味で、魔女狩りの際、女性が告訴される上訴案件は4割に上ったというのは、女性が比較的によく狙わ

れたということを示すものの、それでも事案の数の半分以下なのだ。

また別の地方における個別論文においても同じ現象が確認されている。Boutelet Bernadette, Chaunu Pierre. Etude par sondage de la criminalité dans le bailliage du Pont-de-l'Arche (XVIIe - XVIIIe siècles) (Pont-de-l'Arche 半官区の犯罪件の現地調査 -17-18世紀) . In: Annales de Normandie, 12^e année, n° 4, 1962, pp. 235-262半官領地において、二世紀にわたって（17-18世紀）女性が訴訟にかかる割合は八分の一を超えない。ちなみに、その半官領地では三分の二の案件は「喧嘩の結果、怪我あるいは弊害あるいは殺人」があったという事案であった。

- 21 **女性と死刑** 死刑にされた女性は、魔法犯よりも、（墮胎を含む）の理由の方が圧倒的に多い。今も昔も女性による深刻な犯罪と言えれば孤児殺であるという点に変わらない事は興味深い（フランスでは時々、母が自分の赤ちゃんを子殺したような報道が世間を感動させる）。Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - バリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2, p.208 « En revanche, la «répression» de l'infanticide a été au moins trente fois plus importante, atteignant des proportions tout à fait inattendues : bon an mal an, le Parlement de Paris a prononcé une moyenne de dix peines de mort à l'encontre des femmes coupables d'avoir tué leurs nouveaux-nés. Les tableaux 3 et 4 démontrent la prédominance absolue de l'infanticide dans la criminalité féminine : entre cinquante et quatrevingt-dix pour cent des peines capitales arrêtees par la Haute Cour ; si les hommes sont pris en compte dans le calcul total, entre quinze et trente-quatre pour cent. Une comparaison statistique avec la sorcellerie est particulièrement instructive : pendant la période de «la chasse aux sorcières» (1565-1625), le Parlement a envoyé à la potence cinquante-sept d'entre elles et six cent vingt-cinq infanticides — onze fois plus⁸⁴. »

« Ce sont par conséquent les procès d'infanticide, plutôt que ceux de sorcellerie, qui ont constitué, en France, le principal exutoire des sentiments misogynes si répandus dans la société d'alors. Les deux populations, d'ailleurs, l'une vieille, l'autre jeune, ne se recourent que dans une poignée de cas. . . Nous avons déjà observé le Parlement en train de mettre une sourdine aux procès de sorcellerie, parce qu'incompatibles avec la preuve juridique. On verra dans un instant de quelle façon il a fait de l'infanticide le crime vedette de sa procédure

transparente.»

« Il convient, d'abord, de remarquer un très fort coefficient de spécificité dans les affaires d'infanticide qui se sont présentées en justice. Je n'ai jamais rencontré l'exemple d'un enfant supprimé parce que ses parents craignaient de ne pouvoir le nourrir. Ni le malthusianisme ni le sexisme n'ont de place dans ces milliers de sombres histoires où il n'y va que de l'honneur. Cinq sur huit appelantes se déclarent «filles à marier», souvent domestiques. Dans les cas typiques, la meurtrière se trouve enceinte des oeuvres d'un homme qu'elle ne saurait épouser ; elle recèle sa grossesse, accouche clandestinement et , acculée au désespoir, se débarrasse de la preuve vivante de son déshonneur. Les motivations des veuves (18%) et des femmes adultères (13%) sont identiques. Il n'y a pas d'exceptions. De temps en temps on repère le cas d'une belle-mère inculpée de la mort d'un jeune enfant d'un premier lit, cependant il s'agit là d'un crime nettement dissemblable, à ne pas confondre avec les infanticides de type classique. »

- 22 上訴実行の容易さ Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2, p .194« L'autre question que je me posais au début de mes recherches concernait la part réduite des femmes dans ma population d'appelants-sorciers. Une ventilation géographique des appels montre que les seules régions où l'on trouve une majorité féminine sont situées dans l'Est du ressort : une bande de territoire qui correspondait au quart environ de la superficie mais qui fournissait près de la moitié des appelants au Parlement et plus de la moitié (56%) des appelantes. Dans les provinces limitrophes de l'ancienne Lotharingie : le Boulonnais, la Picardie, le Vermandois, la Champagne, le Barrois et la Lorraine de mouvance française, la Bourgogne, le Maçonnais, le Lyonnais, le Beaujolais et le Forez — les femmes représentaient 61% des appelants ; ailleurs, 40% seulement. Cette moyenne de 40%, cependant, cache des variantes allant de 29% dans le Sancerrois jusqu'à 94% dans le Perche.

Or, interjeter appel n'impliquait nullement une démarche sophistiquée : il suffisait de prononcer les mots : j'appelle. Les archives du Parlement donnent,

par conséquent, le reflet fidèle (sauf abus) des poursuites en première instance. (上訴することは難しいことではなかった。被告人が「上訴する」といっただけで、上訴された。高等法院の上訴案件の全体図は現場の案件の全体図を忠実に反映している（粉飾の事件を除いて）Ce qui ne veut pas dire qu'elles donnent le reflet de la criminalité. Les devineresses-guérisseuses n'étaient vraisemblablement pas moins nombreuses en France qu'en Allemagne ou en Angleterre. Il faut retourner la question : plutôt que de chercher un rapport entre la criminalité réelle et la criminalité apparente, on devrait regarder cette dernière comme un indice du recours en justice. Chaque institution judiciaire possède ses caractères propres qui déterminent l'intensité de ce recours et, en France, on faisait plus volontiers un procès à un sorcier qu'à une sorcière⁵⁰. (それぞれの裁判所の特徴によって、どれほど起訴されるかはきまっている。フランスにおいては、女性よりも男性の魔術師を告訴することが多かった) Quarante pour cent représentent, d'ailleurs, deux à trois fois plus que le taux normal de la part féminine dans la criminalité (apparente) globale. D'après mes sondages, cette part oscillait, au XVIe siècle, entre 12% et 18% — ce qui est tout à fait conforme aux chiffres publiés par Nicole Castan pour le XVIIIe siècle (21% dans le ressort de Paris)⁵¹. »

- 23 拷問の事例の分析 拷問の衰退 Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. p.197 拷問とはいえ、実際に拷問を受けた被告人の内、結局「自白した」件数は非常に少なかったという史実がある。つまり、拷問が実行されても、なるべく軽い形にされていた。その結果、自白を得ることはまれだった。拷問にかけられたとされているパリ高等法院の上訴案件は185件がある。その内に自白を得た案件は一件のみである。以上は次の引用の総意である。« La mise en série des procès de sorcellerie m'a révélé une nouvelle anomalie par rapport aux idées communément reçues. Sur cent quatre-vingt-cinq appelants-sorciers appliqués à la question à Paris, le Parlement n'a obtenu qu'un seul aveu. Cette statistique surprenante m'a incité à opérer trois sondages de courte durée visant l'ensemble des appelants : 1539-1542, 1604-1611 et 1619-1621. Et à titre de comparaison, j'ai ajouté au dossier le témoignage apporté par un document insigne : le Registre criminel du Châtelet de Paris, de

1389 à 139262. A la fin du XIV^e siècle, on arrachait l'aveu à qui on voulait : rares étaient les victimes capables de résister à des séances répétées de torture. Cent cinquante ans plus tard, sous le règne de François Ier, le taux d'aveu ne dépassait plus les dix pour cent. A cette date la moitié des condamnés à la torture se voyaient renvoyés pour subir l'ordalie auprès de leur siège d'origine ; mais peu d'entre eux réapparaissaient, appelant d'une sentence de mort ou de réapplication à la question. Ce qui veut dire qu'une politique de modération de la torture — commencée vraisemblablement au sommet de la hiérarchie judiciaire — était d'ores et déjà assimilée par bon nombre de tribunaux de première instance. La torture avait perdu sa place centrale dans la procédure criminelle française et celle-ci était désormais en mesure de surmonter l'épreuve que représentaient les procès de sorcellerie. Entre 1540 et 1600, le Parlement cessa progressivement de renvoyer les appelants pour être torturés en province. Dans les sondages concernant le début du XVII^e siècle, par conséquent, les aveux sont parfaitement quantifiables : six sur 257 de 1604 à 1611, et deux sur cent un en 1619-1621 (une recherche similaire pour la fin du XVIII^e siècle indiquerait la date à laquelle ce taux dérisoire d'aveu a commencé à remonter la pente)⁶³. » ([16世紀末になっていくと] フランスの刑法裁判における拷問はもはや中心ではなくなっていた。17世紀にはっていくと、1604-1611年の間、拷問のあった案件は257件だが、その内に6件においてのみ自白があった。1619-1621の間、拷問のあった案件は101件だったが、その内に自白した案件は一件のみだった)

判決文と執行文との間の差 続いて、死刑の判決においてでさえ、司法官らはなるべく死刑を過剰な極刑をさけて済ませていたということも明らかになった。
 « Quant à la prétendue cruauté des peines, elle relève de l'image de sévérité impitoyable derrière laquelle se cachait une clémence autrement impopulaire. Dès 1540, l'horreur des supplices les plus spectaculaires : le bûcher, la roue — se trouvait régulièrement modérée par l'administration d'un coup de grâce sous la forme de l'étranglement préalable. L'acte de grâce figurait, non pas dans le corps de l'arrêt (document trop public), mais dans un retention in mente curie: clause amovible, tantôt annexée à l'arrêt, tantôt sous-entendue, selon la volonté de la Haute Cour. Il s'ensuit que les résultats de mes recherches sur ce point ne sont pas chiffrables. Plutôt que de reprendre la matière de mes travaux

publiés⁶⁴, je recours ici à la démonstration que je préfère par-dessus tout : l'explication de texte. » 総意・アンシャンレジームの刑法は酷くて残酷だったというイメージがあるがそれは史実に反する。国民は厳しい刑罰を要求していたので、時に判決文において厳しい刑罰があるが、殆どの場合、執行の際、犯罪者は残酷な死刑より免れた。1540年、極刑の場合、「止を刺す」の執行命令によって、極刑にかける前に、犯罪者を絞殺してあげることがあった。

旧体制の司法制度のイメージの由来 それでは、旧体制の司法制度は厳しかったというイメージが一体なぜ、長らく、ついでいただろうか？それは、公開されている判決だけを見ると、厳しいという判断とならざるをえないからであるが、未公開の実行規定を調べると、実際の執行の際には、刑罰は軽減されていたことが分かる。それは、建前としては司法制度として国民の要求にこたえて「犯罪者に対して」きちんとした厳しい対応を実践することを知らせるためである。面白いことに、18世紀に入ると、国王から直接の封印状をもって死刑から逃す事案が増える中に、司法官として「それは放任を招くようなものだ」として封印状を非難することがあった。つまり、「勝手に刑罰を軽減する独善的な行為は許せない」という非難だ。啓蒙思想家によってそういった封印状がまさに専制政治の象徴として非難されたことは有名であるが、そういった封印状（封印勅書とも）は死刑から逃すためによく使われていたのが真相である。

p.201 « On s'en aperçoit, ici, à travers la dramatisation du supplice du bûcher. On s'en rend compte à propos du ménagement réel de la torture : non seulement les écrits des juristes en perpétuaient l'image dure traditionnelle, mais l'Ordonnance criminelle de 1670 réservait à la torture une place démesurément élevée dans l'échelle des peines⁶⁸. On le voit aussi dans l'entérinement à contre-cœur des lettres d'abolition présentées par le roi au bénéfice de ses proches : dans une monarchie de participation, il incombait au Parlement de faire entendre les voix oppositionnelles ; c'est ainsi que la justice royale protégeait le roi — et elle-même — des conséquences éventuellement fâcheuses d'un nombre excessif de pardons⁶⁹. »

また、以下の文章を要約しよう。拷問に関する数字でいうと、16世紀においての上訴案件の拷問下の自白は非常に少ない。1540年において、拷問での自白は8.4%。17世紀に入ると、2.3%となる。つまり、拷問で得られた自白は殆どないと言っても良い。Soman Alfred. La décriminalisation de la sorcellerie en France(フランスにおける魔法犯罪を処罰の対象から外す過程). In: Histoire, économie et société,

1985, 4^e année, n° 2.p.188-189 clef « Les débuts (de 1540 à 1587) — Les archives du Parlement sont assez lacunaires pour les deux premières décennies de notre série, mais de toute évidence les procès de sorcellerie ne sont pas nombreux : 39 cas seulement retrouvés jusqu'en 1571, dont deux arrêts de mort. L'année 1572 se solde par une pointe aiguë (20 appelants), suivie de huit années de calme relatif (7 affaires par an en moyenne) et ce n'est qu'en 1581 que la courbe des appels commence à osciller autour d'une vingtaine annuelle de procès. A partir de 1572, cependant, la jurisprudence du Parlement se révèle plus dure qu'auparavant : 13 % des appelants condamnés à mort et plus du tiers appliqués à la question.

Rappelons ici que la torture telle qu'elle était pratiquée dans le ressort parisien ne ressemblait nullement à l'image noire communément reçue. Nos recherches à ce sujet, tous crimes compris, font valoir des taux d'aveux étonnamment bas : 8,5 % vers 1540 et 2,3 % au début du XVII^e siècle ; en matière de sorcellerie, sur un total de 185 applications de la question préparatoire (1548-1650), une seule provoqua des aveux qui vouèrent la victime au bûcher. Pareille modération, en France, est sans aucun doute l'un des principaux facteurs ayant empêché la chasse aux sorciers de suivre le modèle horrifiant du Saint Empire (20). Au cours du XV^e et la première moitié du XVI^e siècles, la procédure criminelle française s'était déjà éloignée de l'ancienne théorie des preuves légales qui n'admettait que le témoignage et l'aveu, ce dernier cédant progressivement une large place à la preuve matérielle. Or, justement, le crime de sorcellerie se prêtait mal aux pièces à conviction, une petite minorité seulement des procès-verbaux de perquisition faisant état de graisses pour s'envoler au sabbat, de poudres venimeuses pour jeter des sorts, de recettes ou de caractères magiques. Aussi le Parlement avait-il recours au procédé traditionnel, bien que tempéré, de la torture afin de compléter les témoignages contradictoires et peu concluants, ou de voir plus clair dans les aveux prétendument volontaires, rétractés par la suite. Pour s'assurer que l'ordalie se pratiquât avec toutes les précautions voulues, le Parlement, au long du XVI^e siècle, s'est graduellement réservé à lui seul les applications à la torture : le dernier renvoi en province pour la question eut lieu en 1603. »

(l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. P p.202 « Jusque là, la force de la justice criminelle française — elle était sans doute la meilleure en Europe — reposait sur deux bases : 1) pour les délits de tous les jours, la vigueur des institutions infra-judiciaires, c'est-à-dire, les voies traditionnelles de raccommodement ; et 2) pour les cas énormes, une justice royale pourvue d'une procédure irréprochable et de rites de châtement solennels permettant d'exorciser le crime, sans que la société glisse dans les affres de la vengeance privée. Entre les deux, un large terrain intermédiaire s'est développé : la justice royale est devenue une instance d'accueil des litiges présentées spontanément par les parties civiles ; inversement, le procès officiel — tout au moins, son début — n'était souvent qu'une étape dans la recherche d'un accord officieux. »

旧司法制度の公平さ つまり、フランスにおける司法制度は上からの強制や厳格さではなく、むしろ国民が要求する厳しい司法制度という気持ちを満足させると同時に、むしろ、明らかに犯罪ではない限り、処刑しないという意外と公平な司法制度だと研究者たちは評価している。このような司法体制の整備化の結果、私的な復讐もなくなっていた。 « Or, le procès éclair, transparent et sans bavure, satisfait au besoin de justice ressenti par l'ensemble de la population. Il apporte la preuve que le crime odieux peut se solder par le châtement sur Terre, et non seulement au Ciel. Il compense, pour ainsi dire, les carences, les failles inhérentes aux institutions humaines. Son message s'adresse à tous les sujets du roi assoiffés de justice. Il vise aussi l'individu criminel, bien entendu, mais accessoirement. Dans La colonie pénitentiaire, Franz Kafka décrit une machine qui grave l'inculpation dans la peau du condamné, mais il s'agit d'une métaphore du sentiment de culpabilité, non pas d'un acte judiciaire. A la différence de l'interprétation inspirée de Michel Foucault, aujourd'hui très en vogue, je dirais : le discours de la justice s'adresse à l'honnête homme, éternel revendicateur d'une pénalité impitoyable⁷⁴. »

自治体での和解、和与 また、現場での「自治体」や共同体が、どれほどの大きな役割を持っていたかについて確認できる。日本法制史における「和解」と「和与」といったような制度を連想させる。p.203 « Par surcroît, une étude du comportement des témoins, ainsi que des entorses à la vérité qui abondent dans

leurs dépositions, fait valoir à quel point la justice était subordonnée au bon gré des voisins. Même au milieu du XVIIIe siècle (et plus tard, sans doute, dans les campagnes), même dans le cas d'un crime aussi énorme que l'infanticide, les voisins avaient l'habitude de se constituer en tribunal officieux pour décider, oui ou non, s'ils allaient dénoncer aux autorités la personne suspectée⁷⁶. Sans une «condamnation» par cette instance infra-judiciaire, la justice officielle ignorait nécessairement l'existence même du délit⁷⁷. Ceci ne veut pas dire que le rôle de la justice royale ait été réduit à la simple ratification des jugements villageois. Sa vraie mission était de passer au crible de la preuve juridique, les indices matériels et les dires des déposants afin de garantir que la justice fut toujours juste ; de veiller à ce que le nom du roi ne fut pas invoqué pour légitimer la malversation. »

最後に、次の引用の総意を要約しよう。アンシャンフランの司法制度は公平な司法制度だったものの、最終的に判決数は少なく、多くの犯罪者を見逃していた事実もあった。17世紀末あたりから、ある種の警察的な組織が創立されて、司法制度の欠陥を補う役割だったが、危険とされていたグループの監視を悪用する官吏（警察官）も増えた結果、エリートの間には、革命直前では悪評判を浴びていた。p.204
 « L'ancienne justice, si elle a été beaucoup moins injuste qu'on n'a l'habitude de le croire, n'était pourtant pas très efficace — pas plus que la censure (et pour les mêmes raisons). Ce qui a incité Louis XIV à créer, en 1667, la première lieutenance de police : institution destinée à briser cette belle vitrine. L'essor de la police a été conforté par deux grands coups de théâtre : la démolition de la cour des Miracles (1667) et l'affaire des Poisons (1679-1682). A partir de l'année 1700, sous la lieutenance de Marc-René d'Argenson, l'institution policière empiéta progressivement sur le domaine du droit commun, jusque là si scrupuleusement administré par la justice royale. Abusant de leurs pouvoirs (pourtant avec l'accord du roi), les tribunaux de police employaient des «mouches» pour surveiller les groupes sociaux réputés dangereux et expédiaient de présumés criminels à l'Hôpital Général sans autre forme de procès⁸¹. Ces dégradations de la justice d'Ancien Régime ont sans aucun doute contribué à sa mauvaise réputation posthume, ainsi qu'à son remaniement après la Révolution. »

25 その手続きを描いた付属資料を参照。また、脚注の40番号をも参照。

26 教権属の裁判に譲らず世俗権の裁判は魔法犯を占めるようになった流れ Gauvard

Claude. Ordealie et sorcellerie jugées par le Parlement à Paris et à Bordeaux au milieu du XVe siècle (15世紀の中葉、ボルドーとパリ高等法院における魔法と神判の案件について). In: Bulletin de la Société Nationale des Antiquaires de France, 2009, 2012. p p.50 « En fait, par le biais de cet appel, le Parlement confirme sa compétence dans les jugements de sorcellerie. Il n'est d'ailleurs jamais question de recourir à la justice ecclésiastique qui aurait pu juger du cas. De façon générale, les juges du Parlement, au xve siècle, font de la sorcellerie un cas royal, comme on l'a vu à propos de l'affaire Calvet³¹. A Bordeaux, ce principe est conforté par la situation politique. Les juges royaux ont eu pour consigne de lutter contre la puissance des justices d'Église considérées à la fois comme trop influentes, trop indépendantes et trop laxistes. »引用総意。フランスにおいて、真帆使いの案件は本来ならば、教会裁判の管轄に属しているはずだったが、世俗裁判はそれらの案件を占めることにしていて、教会は関係を持つことはできなかった。その理由は、世俗裁判所は教会の裁判所に抵抗するような方針があって、教会の裁判所は強くて、独立で、また判決において甘すぎたとされていたので、国家は教会にこれらの案件を譲ろうともしなかった。この要素は、中世期の教権と世俗権の協力と対照的である。

- 27 Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition) , Kontre Kulture, 2014, p.15
- 28 Muchembled Robert. L'autre côté du miroir : mythes sataniques et réalités culturelles aux XVIe et XVIIe siècles(神話を超えて。16・17世紀におけるサタン神話と文化的な現実について。). In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 40^e année, N. 2, 1985. P.291に参照。Bouchain という地域を例に、1608年から1652年までの魔女狩りの現象が生じるには、基本的に三つの条件があるということを見つけた。サバト（悪魔罷き）に関する法律条文の存在、下級司法官の熱心さと現地の大衆による熱狂。「Comme leurs aînés les enfants-sorciers de Bouchain sont les victimes de la convergence un triple phénomène la législation sabbatique le zèle d'un petit officier royal, la châtellesie étant le plus petit ressort judiciaire dans la hiérarchie des tribunaux princiers, la poussée purificatrice venue des communautés elles-mêmes compris contre de très jeunes enfants qui sont simplement fils et filles de prétendus sorciers »
- 29 Jean Delumeau, Le Catholicisme entre Luther et Voltaire (Luther と Voltaire の間のカトリック主義), PUF, 1992, p.260 : « ローマ自体に関して言えば、かかる（魔

女狩りの) 搜索起訴手続きによる裁判はまったくなかったわけである。なぜかという、検察聖省が政令を通じて、かかる裁判を制限したからなのだ。»つまり、公会堂の中心地なるローマに近づければ近づくほど、魔女狩りは少なかったということを指摘する Delumeau 氏の論本。

- 30 **魔術犯において聖母マリアを冒瀆する祈祷の事例** しかしながら、中には恐ろしいほどの事案もあると認めざるを得ない。例えば、次の裁判に出てくる冒瀆は信徒から見ると恐ろしい。Paravy Pierrette. Prière d'une sorcière du Grésivaudan pour conjurer la tempête (Procès d'Avalon, 1459 (Grésivaudan 地元の魔女の嵐を安ませるための祈祷について) . In: Le Monde alpin et rhodanien. Revue régionale d'ethnologie, n ° 1-4/1982. Croyances, récits & pratiques de tradition. Mélanges d'ethnologie, d'Histoire et de Linguistique en hommage à Charles Joisten (1936-1981) pp. 67-71
- 31 **魔法犯で処刑される男子の案件** 例えば、1582年の Labouret 魔法裁判の結果、男の子が処刑された。あるいは1632の Loudun の事件。いずれも、現地では何かの戦争、反乱、特別な事情があったことが明らかである。それによって、王権なども弱い時であり、内戦的な状況の中、狂気的な雰囲気になることも多かった中に、そういった世俗裁判が起きたという。Sauzet Robert. Sorcellerie et possession en Touraine et Berry aux XVIe-XVIIe siècles (16世紀と17世紀のTouraineとBerry地方における魔法と悪魔囃り) . In: Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest. Tome 101, numéro 3, 1994. P.72を参照。«Il faut également, bien sûr, situer ces procès dans la conjoncture, politique, économique et religieuse, générale : crise des guerres de religion, tensions sociales suscitées par la «Renaissance malthusienne» chère à E. Le Roy-Ladurie. Le procès de 1582 se situe au milieu de la crise politique qui ensanglanta la France de 1562 à 1598 mais, en 1616, les guerres dites de Rohan n'ont pas encore commencé. Au point de vue économique, tels des accusés de 1582 se plaignent de manquer d'argent pour acheter du blé. Enfin, si à la fin du XVIe siècle et même en 1616, la réforme pastorale n'est qu'amorcée, il est intéressant de noter, dans les deux cas, la proximité de la place protestante de Sancerre. C'est sur une autre «frontière de catholicité» à Loudun, que devait se produire le drame suscité, en 1632, par la possession des ursulines. »
- 32 例えば、Denier Marie-Claude. Sorciers et croyances magiques en Mayenne aux XVIIIe et XIXe siècles (18-19世紀のMayenneにおける魔術師と魔術の迷信につ

いて）。In: Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest. Tome 97, numéro 2, 1990. pp. 115-132

また、ルター、Bodin 司法官をはじめ、多くのエリートは魔法が存在することを疑おうとしなかった。ノルマンコン歴史家が魔女の社会は実在しなかったことを証明しているのに当時の教養人は存在することを確信していたということだ。（『魔女狩りの社会史』を参照）

- 33 第一資料の書き起こし全文。下級裁判の暴走を見てランス大司教は国王に対策を要求する 例えば、次の典型的な資料がある。ランスの大司教は教区における不正な裁判や、下級裁判官による勝手な悪用という状態を確認して、また大衆による暴動を警戒して、以下に記す書簡を国璽尚書官（内閣に大臣に当たる身分）に送って、状況を報告して、王権の対策を要求した。要するに、司教は下級裁判官の暴走を止めるために、国王の対策を要求する。

Sauzet Robert. Sorcellerie et possession en Touraine et Berry aux XVIe-XVIIe siècles (16世紀と17世紀の Touraine と Berry 地方における魔法と悪魔囃り) . In: Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest. Tome 101, numéro 3, 1994. pp. 69-83から の p.82 « III Lettre de l'Archevêque de Reims au chancelier Segulier Reims, le 28 juillet 1644 Monsieur, Depuis quelques mois il s'est glissé de grands désordres en quantité de paroisses de mon diocèse, vers la frontière à cause de certaines personnes que l'on veut faire passer pour sorciers. On les maltraite, on les chasse, on les assomme, on les fait brusler et prend-on cette coutume de lier ceux que l'on a envie de soupçonner et de les jeter en l'eau et s'ils nagent au dessus c'est assez, sont des sorciers. Cet abus est si grand qu'il s'en trouve jusques à 30 et 40 en une seule paroisse ainsy faussement acusez. Je dis faussement parce qu'il en est venu à moy que j'ai confessez et à qui j'ay donné la confirmation qui sont très innocens. C'est un prétexte duquel se servent ceux qui désirent vanger leurs passions ou qui veulent impunément s'emparer du bien de leurs voisins et il leur est trez aisé dans cette persécution si générale. J'ai cru, Monsieur qu'il était de ma conscience et de mon debvoir de vous donner advis de ces désordres qui multiplient tous les jours parce que les petits juges subalternes, sans autre forme de procez et sans prendre connaissance de cause condamnent à mourir sur simple conjecture. Vous me permettez s'il vous plaist de vous dire qu'il seroit bien à propos d'envoyer sur les lieux un commissaire maître des requêtes ou autre, sage et prudent pour prendre

connaissance de ces affaires là et en user selon ou ordres et soubz votre autorité affin d'empescher ces abus et prévenir les malheurs et les accidens qui en arrivent de jour à autre. J'ose vous supplier très humblement d'y avoir esgard pour le bien du public et de me croire s'il vous plaist vostre très humble et obéissant serviteur.

Léonor d'Estampes archevêque de Reims »

- 34 イタリアの北部で魔女裁判があったが、教会のお陰で女性の全員が解放された、裁判官が破門されたという典型的な事例は次の論文において紹介されている。Garnero-Morena Christiane. Approche du phénomène de la sorcellerie en Ligurie occidentale. In: Cahiers de la Méditerranée, n ° 13, 1, 1976. Culture populaire, croyances, mentalités. Actes des journées d'études, Nice, 30 avril 1976. pp. 31-37
- 35 **欧州における女卑観の起源と展開** 欧州の歴史ではこういった女卑観というのは、革命以降の19世紀後半からである。主として、ブルジョワ文化で育てられた女性でありながら、ナポレオンの民法の悪影響を受けて家族の在り方が固定させられたといえる。-たとえば、次を参照。 Régine PERNOUD, 中世に終止符を打つために (Pour en finir avec le Moyen-Âge), Seuil, Paris, 1977.-
Régine PERNOUD, 大聖堂時代における女性 (La Femme au temps des cathédrales), Stock, Paris, 1980.
- 36 次の論文は貴重である。現代に流行である近代期に対する先入観を実証的に暴く研究である。村社会における女性の政治的な権力、婚姻における立場と婚姻の自由、共同体の和を保つ立場などという女性の役割が描かれている。女性の役割と立場が強かったことが描かれている論文である。Muchembled Robert. La femme au village dans la région du Nord (XVIIe- XVIIIe siècles) (北部の村における女性について・17-18世紀) . In: Revue du Nord, tome 63, n° 250, Juillet-septembre 1981. pp. 585-594
p.585 « Les villageoises du XVIIe et du XVIIIe siècle sont moins soumises aux hommes que ne le donne à penser le droit de l'époque. Elles jouent un rôle fondamental dans la transmission de la culture populaire. Elles ont aussi un rapport privilégié avec le corps humain, qu'elles nourrissent et soignent. Elles identifient les dangers, qu'elles exorcisent ou qu'elles désignent aux hommes. Elles disposent d'un savoir et d'un certain pouvoir. Le problème du mariage place également la paysanne au coeur des luttes pour le contrôle et la

domination du village, car la femme se situe, qu'elle le veuille ou non, au centre des stratégies matrimoniales des ruraux. L'interlangage féminin vise d'ailleurs à surveiller les projets d'union, en utilisant fréquemment la rumeur de sorcellerie, par exemple. Une évolution se manifeste à partir du milieu du XVIe siècle : l'antiféminisme des élites se diffuse lentement dans les campagnes. En résulte notamment la chasse aux sorcières, qui permet d'affirmer la puissance de la civilisation masculine et écrite sur la culture populaire orale diffusée essentiellement par les femmes. Bouc émissaire au XVIIe siècle, la villageoise ne se transforme pourtant pas en femme soumise au temps des Lumières, car elle conserve l'essentiel de ses fonctions antérieures, influençant même les mentalités des citadins à l'occasion de la mise en nourrice des enfants. Au fond, les savoirs et les pouvoirs des femmes résistent bien au village, y compris au XIXe siècle, malgré la poussée des forces contraires. Le XXe siècle connaît sans doute en ce domaine plus de bouleversements que le demi-millénaire précédent. »

« La femme est une éternelle mineure, si l'on en croit les spécialistes du droit de l'époque moderne. Elle est étroitement dépendante des volontés des hommes : père, mari, frère, etc. Elle ne peut en théorie se marier ou se remarier sans leur accord. Les coutumes lui interdisent également, par exemple, de témoigner en justice sans la permission de son époux.

反伝統的な近代思想の流行に伴い、女卑観も流行した La condition féminine au village s'éloigne pourtant nettement de ce modèle. Les aspects matériels de la vie, le travail surtout, entraînent une relative égalité entre les conjoints. D'autre part, la paysanne joue un rôle fondamental dans la transmission culturelle et dans les relations sociales. La villageoise dispose ainsi d'un savoir et d'un certain pouvoir. Elle est aussi au coeur des stratégies matrimoniales et elle intervient activement dans ce domaine crucial de la vie communautaire et familiale. Il est pourtant vrai que l'antiféminisme sécrété par les élites sociales tend à pénétrer de plus en plus dans les campagnes aux XVIIe et XVIIIe siècles et modifie lentement la condition féminine au village. » 「近代期の法制史の専門家によると、女性はいつまでも未成年である。父、夫、兄弟などの男性の意志に依存していると。理論上は男性の同意なしに結婚することも再婚することも無理だとされている。また、多くの慣習法は夫の許可なしに裁判で証言をすることはできないと。しかしながら、村においての女性の実際の立場はこのような型からかなり違っていた。

具体的な生活様式、労働様式などは実際に夫婦の間にかなり対等な関係にあった。また、農婦は社交上の関係においても、次世代への文化上の継承においても非常に大きな役割を果たしていた。村の女性たちには知識と権力もあったのだ。ことに、婚姻の戦略という課題になってくると女性の影響力は強くて、家族と共同体にとっての重大なる婚姻について極的にかかわっていた。しかしながら、エリート層に広まっていた「女卑観」は17-18世紀の間、少しずつ田舎にまで浸透している。そのせいで、村における女性の立場は少しずつ変わってきた」

革命に伴う女性の社会位置の暴落とその原因 この研究は貴重であり、近代期とルネサンスに伴って、中世期にはなかった、新しく広まった「女卑観」はまずエリート層にある程度に普及して、そして少しずつ前社会に及んだ。追加すると、フランス革命の一つの結果は女性の社会上の立場が下落した事実がある（Emmanuel de Waresquiel, *Juger la reine* (王妃をさばく), Tallandier, Paris, 2016, p.176 et sq を参照) このような現象はどこから来るだろうか？女卑を普通にしていた古代ローマの復活運動のせい、宗教改革による聖母マリアの崇拝の排除か、まだ研究課題の一つになりうるだろう。

«La paysanne est une productrice. Martine Ségalen souligne à juste titre le fait que ses activités et son travail sont complémentaires de ceux de son mari et qu'elle n'est nullement confinée à l'intérieur de la maison I. Il y a plus. Par essence et par nécessité, elle est le vecteur de la culture populaire. Elle transmet celle-ci dans les nombreux lieux, réels ou symboliques, qu'elle fréquente assidument : l'intérieur de la maison des autres à l'occasion d'un accouchement, lorsque fonctionne l'entraide féminine ; l'endroit où se tiennent les veillées ; le four ; le lavoir ; les places et les routes ; les marchés ; etc. »

p.589 « Mariage et pouvoir au village sont donc fortement liés. Certes, il arrive qu'une fille refuse un galant proposé par son père ou par ses parents. 村において結婚と権力は密接につながっている。時々、処女は親戚あるいは父から勧められた相手を拒否することがあった。Et une relative liberté sexuelle existe parfois, comme à Bouvignies dans la seconde moitié du XVIIe siècle. En règle générale, en tout cas, le mariage est l'objet d'un contrôle de la part de tous ceux dont les intérêts peuvent être mis en cause. Autant dire que les époux et leurs familles ne sont pas seuls en scène : l'ensemble de la société villageoisecomme, juge, tente même souvent d'agir.

Ainsi la rumeur de sorcellerie est-elle fréquemment utilisée pour contrecarrer

des projets de noces 9. ある婚約を失敗にさせるために、「魔術使い」の噂という武器は頻繁に使われていた。L'interlangage féminin distille sur l'ensemble du terroir des accusations plus ou moins vagues, qui prennent souvent leur source dans la haine et la jalousie, mais aussi dans le souci d'éviter la mise en cause de l'équilibre économique, social et politique établi. Ici encore, les femmes désignent le danger, l'évaluent, le prennent au piège de leur parole, tentent de le conjurer, y compris en utilisant un savoir et des techniques magiques. »

p.590 « A partir du milieu du XVIe siècle, pour l'essentiel, l'antiféminisme se renforce dans les mentalités des élites ecclésiastiques et laïques d'Occident. La dévalorisation des femmes, je l'ai montré ailleurs, est l'un des aspects d'un processus d'acculturation des masses populaires 11. Au XVIIe siècle, les filles de famille n'ont souvent le choix qu'entre le mariage contraint ou le couvent forcé. Des lettres de cachet permettent aux pères d'imposer leur volonté à des enfants récalcitrants, notamment lorsqu'ils refusent un projet de mariage établi pour eux. Absolutisme royal et paternalisme vont de pair et évoluent de concert dans les couches supérieures de la société ainsi que dans les villes. Et les théories nouvelles commencent à se diffuser dans les campagnes, par l'intermédiaire d'un clergé mieux formé qu'auparavant, des livrets de colportage ou des ruraux alphabétisés, dont le nombre croit nettement entre l'époque de Louis XIV et la Révolution.

Cependant, la villageoise ne perd pas brusquement les savoirs et les pouvoirs qui étaient les siens auparavant. L'antiféminisme ne pénètre pas aussi aisément que dans les villes. Il prend alors une forme particulièrement dramatique : la chasse aux sorcières, qui concerne essentiellement le monde rural, on le sait, et qui vise dans le Nord 82% de femmes pour 18% d'hommes. »

p.590 « Avec l'infanticide, la sorcellerie est en effet le seul crime qui mette en scène une majorité de femmes. En réalité, les bûchers de sorcellerie proviennent d'abord d'une volonté des élites sociales et politiques du temps de faire triompher la puissance masculine à la campagne. Aux yeux des membres des couches dirigeantes, toutes les paysannes sont des sorcières, car elles connaissent toutes des techniques, des recettes, des pratiques magiques. Leur pensée ne fonctionne pas sur le modèle de celle des dominants. La culture traditionnelle qu'elles transmettent aux générations suivantes est un obstacle au

mouvement d'acculturation, d'uniformisation culturelle, venu du sommet de la société. » 以上の文章においてちょっとした階級闘争的な先入観があるが当時の空気に見るしょうがないだろう。

p.591 « Mais pour les paysans, qui baignent dans un milieu magique, même s'ils sont alphabétisés, toute femme n'est pas une sorcière. Seule est réputée telle celle qui est depuis longtemps stigmatisée par la rumeur publique, celle qui est censée disposer de pouvoirs redoutables, celle qui menace de rendre pauvres ou malheureux ses ennemis, celle qui pratique des conjurations et qui croit trop à sa puissance, etc. Il arrive aussi que l'accusation des sorcellerie soit simplement une arme de guerre contre des concurrents : les paysans les plus aisés l'utilisent aisément contre des individus qui appartiennent à leur niveau socio-économique, qu'ils évitent ainsi de heurter de front mais qu'ils souhaitent affaiblir, ou contre des "clients" de ces mêmes personnages. Dans les deux cas, la rumeur participe aux luttes feutrées incessantes pour la conquête, le partage et le contrôle du pouvoir au village. Car les parents et les proches d'une sorcière brûlée sont désormais marqués, suspects, ce qui fait bien l'affaire de ceux qui rachètent les biens de la condamnée et qui renforcent leur position au détriment de ses proches. »

女性の立場とカトリック p.593ここでは、トレント公会議によるカトリック改革の効果がみられる。カトリック信仰の復興のお陰で、女性の立場は改善されたことを示す文章。

« La spiritualisation du catholicisme, la promotion de l'image de la Vierge, mettent en valeur le modèle de la rosière, pour qui se multiplient les fêtes au XVIIIe siècle, et celui de la nonne. Celles qui ne peuvent atteindre l'un de ces idéaux sont dépréciées, à leurs propres yeux comme à ceux des hommes. Enfin, une tendance à restreindre l'espace féminin et à le centrer sur l'intérieur de la maison, d'ailleurs de plus en plus mise sous la protection des signes chrétiens, afin de refouler les marques magiques qui la peuplaient auparavant, s'esquisse à l'époque moderne et s'amplifie au XIXe siècle.

Au fond, on distingue plus de continuités que de ruptures brutales dans la condition et les fonctions de la femme au village, au moins lorsqu'on considère le long terme du XVe au XIXe siècle. Après 1914, et surtout depuis une ou deux générations, il n'en va plus de même : la situation évolue plus vite et plus

radicalement sous nos yeux que durant le demi-millénaire précédent. L'histoire cède alors la place à l'actualité. »

- 37 Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition) , Kontre Kulture, 2014, p.64
- 38 Ibid, p .67など。例えば、有名の Jean Bodin 司法官（また、法学での大権威者）とか医者 of Ambroise Paré とかが魔女狩りを後押ししたりした。
- 39 旧約の時代に有効していた法。つまり、キリスト到来の以前のユダヤ法をさす。
- 40 Ibid, p.66. 元々は、Johanne Janssen, L'Allemagne et la Réforme (ドイツと宗教改革) , Volume 8, Plon, p.554から引用された。大教理というのは、フランス語に訳されたのは以上の Janssen 著だけのようで、ドイツ語版を確認する価値はあろう。
- 41 後述するが、スペインでは、教会許可取得の王国立特別捜査裁判があって、「異端裁判」と呼ばれる裁判なのだが、歴史的にはプロテスタント教系にあった「魔女狩り」とは無関係である。

近代思想の流行に伴い、女卑観も流行した また次の論文を参照。それによればスペインにおける魔女狩りの概観が紹介されている。スペイン北部に極僅かな地域に限られた現象であり、強きスペインのインクイジションのお陰で、魔女狩りの暴動は爆発する前に止められたとことが紹介されている。スペインでも実質的に魔法犯で告訴されるのは無理となった。Soman Alfred. La décriminalisation de la sorcellerie en France(フランスにおける魔法犯罪を処罰の対象から外す過程). In: Histoire, économie et société, 1985, 4^e année, n° 2..198-199 « Le cas espagnol nous est mieux connu depuis la publication de l'excellent ouvrage de Gustav Henningsen relatant la confrontation en Navarre entre la chasse aux sorciers et le tribunal de l'Inquisition établi à Logrono (41). Après un premier foisonnement de bûchers au début du XVIe siècle, l'Inquisition — autorité suprême en matière de foi — tenait la bride haute aux cours laïques : les exécutions cessent, jusqu'à la panique survenue des deux côtés des Pyrénées en 1608 (la même panique qui fut l'objet de la célèbre commission du Parlement de Bordeaux, envoyant Pierre de Lancre et Jean d'Espaignet dans le pays de Labourd). Avec ses procédures méticuleuses et lentes, le tribunal de Logroño se trouva vite inondé de près de deux mille affaires de sorcellerie. Les rapports de l'inquisiteur Alonso de Salazar, récemment découverts, exposaient que, paradoxalement, le désordre était causé par l'accueil que faisait la justice aux dénonciations. Le

débat fut intense mais bref. Par son Instruction de 1614, la Suprema ordonna en effet à ses gens de battre en retraite et le calme se rétablit : l'autodafé de Logrono en 1610 (onze peines de mort dont cinq en effigie) fut le dernier à frapper des sorciers. Bien entendu il y eut des protestations de la part des cours séculières : en 1616-1619, par exemple, l'Inquisition dut mettre fin à de nouvelles épidémies de poursuites en Catalogne et aux environs de Bilbao, mais l'Espagne ne connut plus de procès légitimes. De l'autre côté de la frontière, en Labourd, les choses se sont-elles passées de la même façon, c'est possible. Car des documents espagnols nous apprennent que la commission bordelaise fit volte-face en 1610-1611, rejetant toute accusation dépourvue de preuves matérielles (42). »

- 42 Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition) , Kontre Kulture, 2014, p.80
- 43 Marion Sigaut, 魔女狩りと宗教裁判 (La chasse aux sorcières et l'inquisition) , Kontre Kulture, 2014, p.60 というのも、中世期においてこそ信仰の最強期であったとも言えるが、その分、理性も栄えた一方で、ルネサンス期になってから、迷信の方が強くなり流行るようになって、不均衡な合理主義も生じ始めていて、近代主義の悪弊の前兆が「ルネサンス期」において見受けられる。
- 44 訴訟手続きと証拠法の紹介 拷問の在り方 証拠法との関連 また後述するのだが、それ以前、訴訟の際、条件付きで自白を得るために拷問にかけることは可能だった。Romano-carholique 訴訟手続きになるのだが、条件はあった。有罪判決を出せるために、ある特徴的な証拠法があって、つまり法律通りに刑罰を言い渡せるためには、「満証拠」を二つに必要だった。ここでいう「証拠」はある種の抽象的な概念であって、法典では細かくどういったような証言はどういった価値があるか規定が多かった。で、場合によって「半証拠」との価値の証拠もあったら、ゼロの価値の証拠もあった。満証拠二点あった時、法律の条文通りに有罪判決を言い渡すことは初めて可能となっていた。つまり、裁判官が法律の条文通りに、最大の刑罰の判決をだすために二つの満証拠が最低とされていた。証拠の価値に関して、適応の際、裁判官らに判断にも任せて、疑問がある場合、過小評価することが多かった。それで、ある案件の際、真理の結果、すべての証拠そろっても、半証拠から1.5証拠までそろった場合、拷問をかけることは可能だった。半証拠以下だったら、「無罪」だと自動的に認められて容疑者が解放された。なぜかこのような制度になっていたかという、自白が一番強い証拠だと認められていた司

法官制度だったからである。が、同時に無罪な人を有罪にするわけには行けないという強い警戒心もあった。したがって、0.5証拠以下だと、根拠が足りないということで、自動的に容疑者は解放された。0.5証拠以上だと、有罪だと法律上に確信を得られないものの、無罪を示すような根拠がない場合、有罪性の可能性のみがいくつかの証拠で示されている場合、拷問にかけられる選択肢は司法官に任せられた。が、拷問下で得られた自白は証拠能力を持たず、一般の審理の際、もう一度、拷問なしに、自白がない限り証拠にされなかった。また、神判という意味合いでも拷問が使われた。つまり、無罪を支える何の手掛かりがないままに有罪の可能性が高いものの、完全に有罪である確信を持ってない場合、つまり有罪・無罪の決断は曖昧のままの場合、拷問にかけて、自白しないで済んだら無罪という判決に自動的になっていた。

例えば、次に参照。

Dedieu Jean-Pierre. L'Inquisition et le Droit: analyse formelle de la procédure inquisitoriale en cause de foi (インクイジション裁判と法学。信仰犯起訴における起訴様式の形式上の分析) . In: Mélanges de la Casa de Velázquez, tome 23, 1987. pp. 227-251

引用総意。ちなみに、誓願の下に、形式通りに自白が得られない限り、証拠力は乏しかった。多くの法律家は拷問の下の自白にたいしてあまり信頼していなかった。 p.237 « II en va de même si la source de leurs informations est le coupable en personne 22. La confession du coupable est le témoignage le plus sûr et sa valeur est supérieure à celle d'un témoin parfait. Seule vaut ainsi, cependant, la confession judiciaire, faite au juge sous serment et dans les formes. L'aveu extra-judicium n'a le poids que d'un témoin, lorsqu'il a été recueilli par deux personnes, comme nous venons de le voir. La méfiance à l'égard des aveux faits sous la torture est notable chez beaucoup d'auteurs. Par ailleurs, l'aveu doit être vraisemblable, sans équivoque ni contradiction, et la matérialité du délit établie par d'autres indices. Quoiqu'il en soit, il reste la plus forte des preuves. Il justifie, en principe, la condamnation. Dans l'hérésie, où l'existence d'indices extérieurs n'est même pas nécessaire, il se suffit à lui-même. Cette entorse aux règles normales du droit est justifiée par la difficulté de la preuve dans ce genre "d'affaires"²³. Seul il met en paix la conscience du juge, qui doit toujours le rechercher, même lorsque les autres preuves sont légalement suffisantes ; éventuellement, il les complète. Le refus de l'aveu, s'il est maintenu sous la

torture, crée une présomption très forte en faveur de l'accusé: certains soutiennent qu'il détruit la force des indices et des preuves antérieures et rend obligatoire une sentence absolutoire. D'autres, plus nombreux et plus modérés, considèrent qu'il affaiblit de telle sorte la position de l'accusateur qu'il devient impossible d'infliger la condamnation maximum prévue par le droit²⁴. » また、拷問にかかっても、自白はなかったら、殆どの場合、自動的に無罪解放となっていた。

「質問」に関する規定 p.246 « QUESTION : La torture judiciaire in caput proprium, destinée à faire avouer par l'accusé son propre délit, n'était pratiquée que, lorsqu' arrivé à ce stade de la procédure, les preuves rassemblées contre lui se situaient entre la demi-preuve et la preuve entière, ou aux alentours de cette dernière. Lorsque sa culpabilité était largement démontrée, on lui épargnait cette épreuve. En dessous de la demi-preuve, on devait le relâcher sans le mettre à la question (p.239-240).

La torture in caput alienum visait à obliger un accusé déjà convaincu de son crime à révéler le nom de ses complices. Seule, en principe, l'Inquisition avait le droit de la pratiquer, le témoignage des complices étant théoriquement sans valeur dans les affaires autres que d'hérésie. Sous ces deux formes, la torture n'était pratiquée qu'en suivant des règles extrêmement strictes quant à sa durée, aux techniques employées, à sa fréquence. L'Inquisition ne l'utilisait que dans les cas d'hérésie formelle (judaïsme, mahométisme, protestantisme), à l'exclusion presque totale des autres délits. Ces limites semblent avoir été correctement respectées par les inquisiteurs³⁴. »

p.247 « RATIFICATION DE LA QUESTION: L'accusé doit ratifier les déclarations faites sous la torture au moins vingt-quatre heures après la séance, sous peine de nullité. Le refus de ratification annule, en principe, ses aveux. »

- 45 Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. pp. 193 «Situant le cas français dans son contexte européen, je l'ai proposé comme modèle explicatif de la géographie des poursuites. En effet, la haute justice des Etats forts du XVI^e siècle — l'Espagne, la France, l'Angleterre, le Danemark — n'a jamais conforté les chasseurs de sorciers et les

bûchers s'y sont éteints de bonne heure. Par contre, en Ecosse et dans le Saint Empire, les magistratures de petite envergure manquaient de force pour résister à l'opinion publique et les poursuites ont pu s'y perpétuer bien plus longtemps⁴⁷. »つまり、王権が強かったフランス、スペイン、イギリスとデンマークでは、魔女狩りは早い段階で抑えられて、なくなっていたが、神聖ローマ帝国（ドイツ）ではさらに50年間ほど激しく魔女狩りは続いた。

- 46 Alfred Soman の諸論文を参照。この学者はアメリカ人であり、実証主義を是としながら、外部からの視線を与えて貴重な研究を行った。Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. pp. 177-217 自国の古い資料を初めて閲覧した記憶を述べる文章を読むと、学者なら感動する p.178 « C'était mon premier contact avec des documents plus anciens que mon pays d'origine. Un Français peut-il comprendre l'émotion d'un Américain qui se penche sur des papiers vieux de trois siècles et demi ? Le manuscrit, en tant qu'objet, n'a jamais cessé de me fasciner. Le document parlant est un peu comme une machine à remonter le temps. ».

フランスにおける魔法犯にかかわる案件数、死刑数、拷問数 それはさておき1540年から1670年までのパリ高等法院（上訴裁判所）の裁判書類を網羅的に調べたところ、魔法犯に対する全体像が通説とかなり異なる結果が出た。全国の三分の一ぐらいの上訴案件を取り扱う裁判所であるパリ高等法院、全国の告訴の状況の全体図をよく表されていると Soman 氏が指摘する。案件の結果、以下の表に表されている。189ページ。

VENTILATION DES ARRÊTS DU PARLEMENT POUR FAIT DE SORCELLERIE

	1540-oct.1587	oct. 1587-mai 1610	mai 1610-1670	Total
Appelés	365	479	539	1 254
Condamnés à mort	37 (12,3%)	58 (12,3%)	13 (2,4%)	103 (8,2%)
Relâchés	91 (24,9%)	166 (34,7%)	262 (51,4%)	519 (41,8%)
Appelés à la question	91 (24,9%)	86 (18,2%)	8 (1,5%)	185 (14,8%)

魔女狩りが一番激しいはずの時期でさえ、魔法犯案件だけでいうと1254案件の内、死刑判決を受けたのは8.2%しかない。拷問を受けたのは14.8%しかない。その後の研究で、数字はちょっとだけ更新されて、1287案件のうちに処刑されたのは104人だけということが判明した。

47 Soman Alfred. Sorcellerie, justice criminelle et société dans la France moderne (l'ego-histoire d'un Américain à Paris) (近世フランスにおける魔法、刑法と社会 - パリに滞在するアメリカ学者の振り返り) . In: Histoire, économie et société, 1993, 12^e année, n° 2. pp. 192-193« Deux facteurs sont à l'origine de la décriminalisation de la sorcellerie : l'incompatibilité de celle-ci avec une justice qui se voulait mesurée et rationnelle ; la conviction que les abus judiciaires étaient étroitement liés aux poursuites légales. Voici, en bref, ce qui s'est passé. Dès la grosse vague de lynchages et d'exécutions sommaires survenue dans la région ardennaise, en 1587-1588, les gens du roi préconisèrent le remède : rendre l'appel obligatoire dans tous les procès de sorcellerie. » 「魔法の無罪化の要因は二つある。第一、魔法を有罪化するのは節度を取った合理的な司法制度と相いれなかったからである。また、訴訟上の悪用は訴訟開始と密接的にかかわっていると当時の司法官たちが確信していたからである。要する、一言でいうと、無罪化は次のプロセスを辿った。Ardennes 地方においての1587-1588年の大きなリンチの波に伴った略式裁判と死刑執行を見受けた国王の側近の人々は次の対策を提案した。魔法にかかわる案件だったら、上訴を義務化すること」

p.193 « Cette période de jurisprudence confuse prend fin vers 1600, grâce à l'éclat opportun de trois scandales — procès grossièrement abusifs — et, le 17 août 1602, le Parlement arrête l'appel d'office en matière de sorcellerie⁴⁵ »

« Deux ans plus tard, le 24 juillet 1604, le Parlement réitère les mêmes prescriptions dans un langage que l'on retrouvera mot pour mot dans l'arrêt général du 27 juin 1624 (ce dernier diffusé par l'imprimerie). Les lourds frais de conduite entraînés par l'appel obligatoire, conjugués avec un taux de relaxe extrêmement élevé, découragèrent et firent tarir les procès de sorcellerie à leur source. Les sorciers ont été les premiers criminels à bénéficier de l'appel de droit promulgué pour l'ensemble des crimes de droit commun, par l'Ordonnance criminelle de 1670 »⁴⁶. » 1602と1604年の王令で、魔法案件の上訴を義務化する。

48 フランスに限っていえば、殆どの場合、何かの乱闘があったり、あるいは社会不安があったりする場合が多い。例・プロテスタントとの緊張関係（ボルドーの奪還の際）、あるいはラ・フロンド反乱の前後、などなど